

# 川倉小学校遺跡

— 社会福祉法人「あしの会」による  
サービス棟他の建設工事に係る発掘調査報告書 —

2006年 3 月

五所川原市教育委員会  
社会福祉法人あしの会



# 序 文

川倉小学校遺跡は、旧金木町の藤枝溜池の北岸に位置する古代の遺跡であります。平成17年7月4日から8月12日にかけて、あしの園デザインサービス棟建設に先がけて、発掘調査が実施されました。

その結果、平安時代の竪穴住居跡が7棟確認され、その内の1棟は、10mを超える巨大な竪穴住居跡でした。第6号竪穴住居跡は、焼失家屋であり、部材は分析の結果ヒノキ科及びクリが使用されていました。1棟を除いて、各竪穴住居跡には白頭山火山灰が堆積しており、10世紀第二四半期にはすでに廃絶していたものと考えられます。

出土した遺物は、残念ながら、長芋耕作時のトレンチャーにより、復元できた個体は少ないものの、多くの土師器や須恵器が出土しています。また、特徴的な遺物として土で作られた錘が多数出土しており、この集落に生活していた人々は、河川における網漁を行っていたことが考えられます。

この報告書が当地の埋蔵文化財の調査・研究、あるいは文化財保護の資料として活用されれば幸いに思います。

最後になりますが、この報告書の刊行に際し関係各位には多大なるご指導・ご鞭撻を賜りましたことをここに厚く感謝申し上げます。

平成18年3月24日  
五所川原市教育委員会  
教育長 高松 隆三

## 例言・凡例

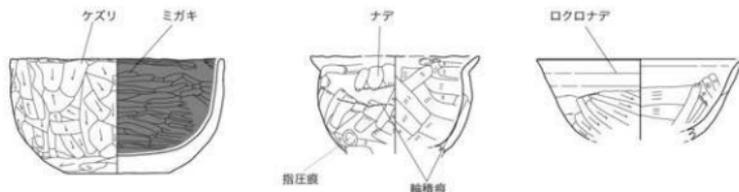
1. 本報告書は社会福祉法人あしの会によるあしの園デイサービス棟その他の建設事業に伴い、平成17年度に五所川原市教育委員会が発掘調査を実施した川倉小学校遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本報告書の編集・執筆は藤原が行った。
3. 住居跡堆積の火山灰の同定分析及び住居建築材の樹種同定は、(株)パリオ・サーヴェイに依頼した。
4. 本報告書に掲載した地図は、国土地理院発行の2万5千分の1の地形図「金木」を複製して使用した。
5. 遺構のスケールは基本的に60分の1としたが、一部紙幅の都合上100分の1にしたものもある。土器実測図及び拓影図は3分の1、土鍾の実測図は2分の1にした。石製品は1部を除いて3分の1で掲載した。写真も実測図同様3分の1としたが、厳密ではない。
6. 遺構の堆積土の注記には『新版土色帖』（小山・竹原 1994）を用いた。
7. 図中で用いた遺構・遺物のスクリーントーンは指示の無い以外以下のとおりである。



8. 図中で用いた遺物のドットは指示の無い以外以下のとおりである。



9. 遺物の実測中で示した各種調整技法は以下のとおりである。



10. 引用及び参考文献は、巻末にまとめた。
11. 発掘調査における出土遺物は一部あしの園にて常設展示している他は、すべて五所川原市教育委員会にて保管している。
12. 発掘調査及び本報告書作成にあたって、下記の諸氏からご助言・ご協力を頂いた。ここにご芳名を記して感謝申し上げます（敬称略）。

長利豪美、川村眞一、近藤昌浩、齊藤淳、柳原滋高、鈴木和子、相馬信吉、村越潔

# 目 次

第1章 調査の概要	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査要項	1
第3節 調査方法と調査の経緯	2
第2章 遺跡周辺の環境	4
第3章 検出遺構と出土遺物	7
第1節 平安時代	7
第2節 遺構外の出土遺物	34
第4章 川倉小学校遺跡の自然化学分析	パリノ・サーヴェイ株式会社 37
第5章 小論	41
第6章 まとめ	44

## 図版目次

図1 発掘調査全体	2	表5 SI05 カマド土層観察表	24
図2 周辺の遺跡	5	図20 SI05 遺物出土状況	24
表1 周辺の遺跡	6	図21 SI05 出土遺物	25
図3 SI01・04	7	図22 SI06	26
表2-1 SI01 土層観察表	8	表6 SI06 土層観察表	27
表2-2 SI04 土層観察表	8	図23 SI06 カマド	28
図4 SI01 カマド	8	図24 SI06 遺物出土状況	29
図5 SI01・04 遺物出土状況	9	図25 SI06 出土遺物	30
図6 SI01 出土遺物	9	図26 SI07	31
図7 SI02	10	図27 SI07 カマド	32
図8 SI02 カマド	11	図28 SI07 遺物出土状況	32
図9 SI02 遺物出土状況	12	図29 SI07 出土遺物	33
図10 SI02 出土遺物(1)	13	図30 遺構外出土遺物	34
図11 SI02 出土遺物(2)	14	表7-1 出土遺物観察表(1)	35
図12 SI03	15	表7-2 出土遺物観察表(2)	36
表3 SI03 土層観察表	16	表7-3 出土遺物観察表(3)	36
図13 SI03 柱穴セクション図	16	図31 火山ガラスの屈折率測定結果	37
図14 SI03 カマド	17	図32 B-Tmの火山ガラス	38
図15 SI03 遺物出土状況	18	表8 樹種同定結果	38
図16 SI03 出土遺物(1)	19	図33 炭化材	39
図17 SI03 出土遺物(2)	20	図34 竪穴住居跡の変遷図	41
図18 SI05	22	図35 青森県内における 古代の土錘出土遺跡位置図	42
表4 SI05 土層観察表	23		
図19 SI05 カマド	23		



## 第1章 調査の概要

### 第1節 調査に至る経緯

平成16年7月16日に川倉小学校遺跡地内で社会福祉法人あしの会によるあしの園デイサービス棟の建設工事が行われるとの連絡が、旧金木町教育委員会にあった。そこで旧金木町教育委員会は県教育委員会に指導を仰いだ結果、7月21日に県教育委員会指導の下、現地確認が行われた。その結果工事に際しては、事前に試掘調査が必要であると判断を受け、平成16年8月18日から8月24日にかけて県文化財保護課指導の下、旧金木町主体により試掘調査を実施した。調査の結果、カマドと考えられる焼土や粘土を伴った竪穴住居跡を3棟、竪穴住居跡と考えられる遺構3基、土壇1基を検出した。これらの遺構は土師器を伴っており、古代の遺構と考えられる。また、土師器や須恵器の遺物包含層も数箇所を確認している。以上の調査結果から、今回調査対象とした範囲は集落跡であり、本発掘調査が必要であると指導され、平成17年7月4日から本発掘調査を実施した。

### 第2節 調査要項

1. 調査目的 社会福祉法人あしの会によるあしの園デイサービス棟建設工事に先立ち、当該地区に所在する川倉小学校遺跡の発掘調査を実施し、その記録を保存して、地域社会の文化財の活用に資する。
2. 調査期間 平成17年7月4日から8月12日まで
3. 遺跡名及び所在地 遺跡名 川倉小学校遺跡（遺跡番号 016）五所川原市金木町川倉七夕野 84-444, 445
4. 調査面積 約3,000㎡
5. 調査委託者 社会福祉法人『あしの会』
6. 調査受託者 五所川原市教育委員会
7. 調査担当機関 五所川原市教育委員会
8. 調査体制
 

調査員 高松 隆三（五所川原市教育委員会教育長）  
葛西 皓（五所川原市教育委員会教育部長）

調査担当者  
五所川原市教育委員会生涯学習課

課長 中村 健  
課長補佐 盛 重人  
係長 佐藤 文孝  
主任 藤原 弘明  
主任 小笠原 誠  
主事 山中 潤哉

### 第3節 調査方法と調査の経緯

#### 第1項 調査方法

調査区外に設定した第X系基準点 (X = 102418.145, Y = -31813.707) に基づき、X軸方向にAA, AB, AC・・・、Y軸方向に01, 02, 03・・・と4mごとに基準杭を設定し、北西端をグリッドの名称とした。

遺構の精査は、セクションベルトを設定し、セクションベルトにおいて包含層を確認しながら、上層から順に掘り下げるように努めた。また、埋土層より火山灰の検出がみられたため、可能な限り、サンプルを採取した。さらに、焼失家屋については、炭化材の出土状況の写真撮影、実測図作成後、すべての炭化材をサンプルとして採取した。

遺物は、遺構に直接関係すると考えられる個体に関しては、トータルステーションを使用して、位

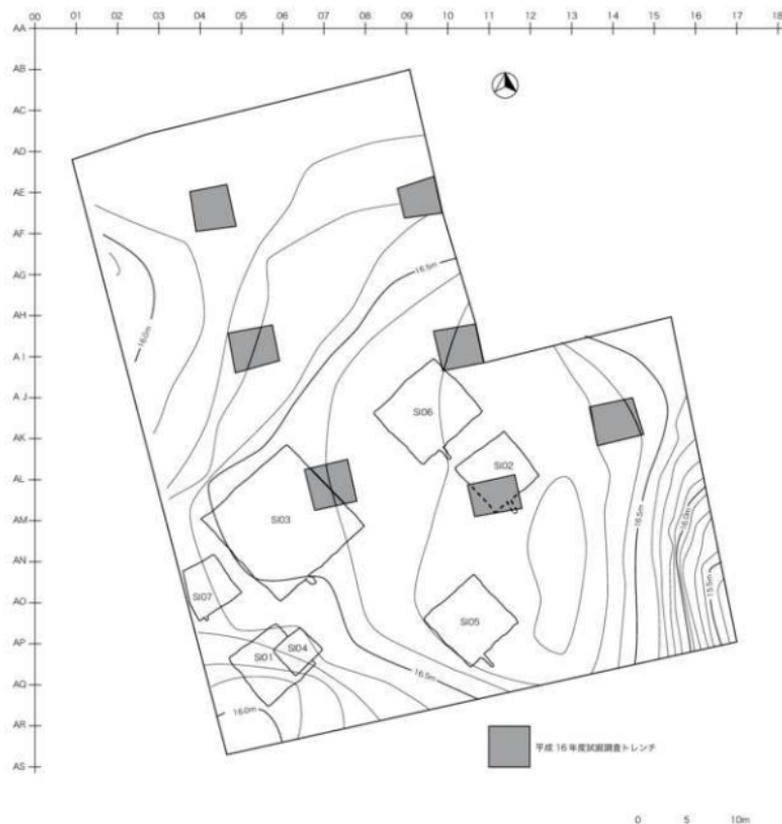


図1 発掘調査区全体

置情報を記録した、その他の遺物については各グリッドごとに一括して取り上げを行った。

遺構の実測は、トータルステーションを使用して座標値を求め、それを図化する方法を採用した。但し、時間効率を優先し、遣り方実測も併用した。

写真は、ニコンのFM 2を使用して、モノクロ及びカラーリバーサルで撮影した。また必要に応じてデジタルカメラ（コンタックスTVSdegital）による撮影も行った。

## 第2項 調査の経緯

6月24日～28日 発掘調査を実施するにあたり、五所川原市教育委員会立ち会いのもと重機により表土の除去を行った（写真1）。

7月4日 機材を搬入し、午後より表土下の黒色土層（I層）及び暗褐色層（II層）の除去を行い、遺構の有無を確認することにした。

7月5日～7月18日 表土直下の自然堆積層の除去と併行して昨年度実施された試掘調査のトレンチ部分の掘り下げを行ったところ、いずれの試掘トレンチでも地山層直下40～50cm程掘削されており、遺構の確認がなされているトレンチでも、残存している部分がわずかであったため、まず試掘調査で確認されている住居跡の精査から行うこととした（遺構確認面までの自然堆積層の除去が終了した）。

7月19日～7月29日 試掘トレンチにより確認されている3箇所の住居跡SI01～04の精査を行う。同時に周辺の遺構の有無の確認を地山直上まで掘り下げて確認したところ、他に3棟の住居跡（白頭山火山灰により確認。）が確認され、精査を行う。また市役所の職場体験の一環として7月21日・22日の両日に五所川原第1高等学校の学生に発掘調査を体験して頂いた（写真2）。さらに博物館実習の一環として、7月25日～28日まで、弘前学院大学の学生3人に発掘調査を体験して頂いた。さらに

8月1日～12日 全ての遺構の精査を行った後、調査区全体の地形測量及び写真撮影をした後機材を搬出して発掘調査は終了した。



写真1 重機による表土除去状況



写真2 五所川原第1高等学校の生徒による発掘調査体験実習状況

## 第2章 遺跡周辺の環境

金木地区は津軽半島の南西端に位置し、津軽半島で最も広く平野が発達している低地帯に属する。地形は東部の東部山稜地域、西部の岩木川氾濫原地域に2分される。東部山稜地域は、陸奥湾側と日本海側とを分ける中央脊梁山脈の西縁部をなして、北北東から南南西方向にのびた山稜を形成し、その西縁部には3段の丘陵が発達している。

これらの段丘群には、北部では北北西から南南東方向にのびる平坦な第1・第2段丘が発達するが、喜良市付近で中断され、そこには、扇状地状の第3段丘が発達し、南部では南北方向の第2段丘のみが発達する。

川倉小学校遺跡は、五所川原市金木町川倉七夕野に所在し、藤枝溜池の北岸舌状台地上（標高15m前後）に位置する。この遺跡の立地する台地は、大倉岳に源を発する新川と金木川に挟まれた金木段丘上（上述の第2段丘）に属する。この金木段丘は、岩木川東方に顕著に発展する河岸段丘の内、中位段丘に対比され、屏風山一帯及び津軽山地西縁部に顕著に発達し、標高10～25mの極めて平坦な段丘面である（山口 1995）。

本遺跡が所在する周辺では、現在までに確認されている遺跡は約50箇所にのぼる（図2）。遺跡が集中する箇所は、大沢内溜池周辺、藤枝溜池周辺、金木川の兩岸、清久溜池周辺である。最も古い時期の遺跡は、本遺跡から東へ約5kmほどの金木川中流左岸丘陵上に後期旧石器時代の尖頭器や彫器が出土した相野山遺跡がある。

縄文時代早期から後期にかけては、藤枝溜池東岸に位置する芦野（2）遺跡、妻の神（1）・（2）遺跡、へび沢遺跡など約20箇所の遺跡が確認されている。そして晩期になると、中泊町大沢内溜池周辺に位置する深郷田遺跡、大沢内遺跡、前述の芦野（2）遺跡、金木川南岸の千刈（1）遺跡など数箇所の遺跡が確認されている。

続く弥生時代から奈良時代にかけての遺跡は少なく、藤枝溜池南岸に位置する神明町遺跡で弥生時代の土壇墓や古墳？時代の蕨手刀が発見されたという報告が見られ、また千刈（1）遺跡では奈良時代後期に比定される銅剣が発見されたという報告が見られる（竹内 1977）。この時期に遺跡数が減少する理由として、気候の寒冷化及び遺跡の立地場所の変化（沖積平野への進出？）等が考えられる。

平安時代になると遺跡数が増加し、本遺跡も含めて、約30箇所が確認されている。この時代の遺跡に特徴的なことは、遺跡の立地場所が、縄文時代の遺跡と変化が無いということである。約30箇所を数える平安時代遺跡の内、縄文時代の遺物を出土する複合遺跡は13箇所と約半数である。藤枝溜池南岸に位置する神明町遺跡では、竅穴住居跡から須恵器の大甕が出土している。

中世になると金木館遺跡や嘉瀬館遺跡などが確認されている。金木館は旧金木町の中心部「高屋敷」と呼ばれる場所が比定されており、現在では市街地化が進み、確認することは困難である。嘉瀬館は通称「館ッコ」と呼ばれ、小田川北岸に位置し、堀跡が確認されている。

近世の遺跡としては千刈（1）遺跡のみであり、近世の墓地と銭貨埋設遺構が検出され、江戸時代後期の人骨片7体分と陶磁器及び銭貨が出土している。

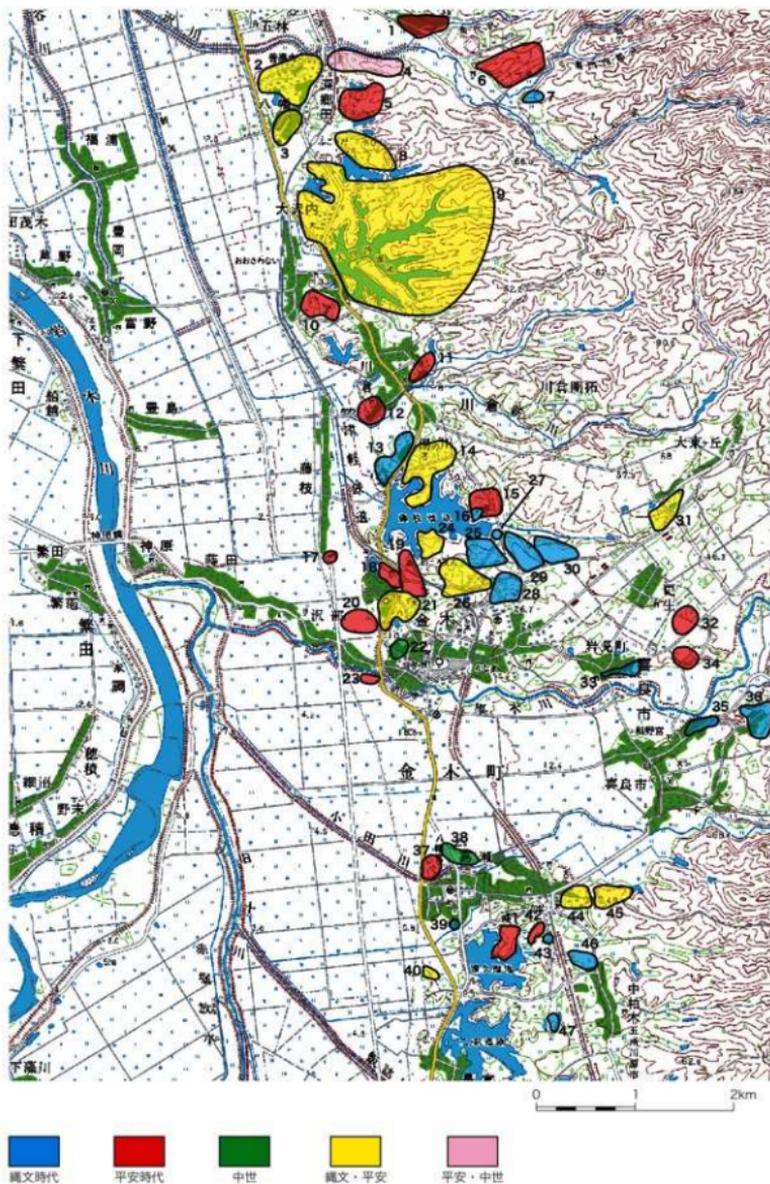


図2 周辺の遺跡（国土地理院発行5万分の1地形図「金木」を加筆作成）

表1 周辺の遺跡

No.	遺跡名	遺跡番号	所在地	時期	種別
1	宮野沢遺跡	36029	北津軽郡中泊町宮野沢苗代沢	平安	散布地
2	深郷田遺跡	36010	北津軽郡中泊町深郷田富森	縄文(前・中・後・晩)、平安	散布地、集落跡、貝塚
3	八幡遺跡	36022	北津軽郡中泊町八幡八幡	縄文、平安	散布地
4	一本松遺跡	36011	北津軽郡中泊町深郷田甘木	平安、中世	集落跡、城跡跡
5	甘木遺跡	36012	北津軽郡中泊町深郷田甘木	平安	散布地
6	蛭沢遺跡	36005	北津軽郡中泊町宮野沢蛭沢	平安	散布地
7	宮野沢母沢遺跡	36020	北津軽郡中泊町宮野沢袴越山、袴越山国有林?	縄文	散布地
8	甘木南遺跡	36024	北津軽郡中泊町深郷田甘木	縄文、平安	散布地
9	大沢内遺跡	36009	北津軽郡中泊町大沢内海原	縄文(前・中・晩)、平安	散布地、集落跡
10	二ツ見遺跡	36008	北津軽郡中泊町大沢内二ツ見	平安	散布地
11	宇田野遺跡	35015	五所川原市金木町川倉宇田野	平安	散布地
12	林下遺跡	35025	五所川原市金木町川倉林下	平安	散布地
13	湯の川遺跡	35014	五所川原市金木町川倉七夕野	平安	散布地
14	川倉小学校遺跡	35016	五所川原市金木町川倉七夕野	縄文、平安	集落跡
15	さいの河原遺跡	35013	五所川原市金木町川倉七夕野	平安	散布地
16	芦野(2)遺跡	35008	五所川原市金木町芦野	縄文(早・前・中・後・晩)	散布地
17	藤枝遺跡	35021	五所川原市金木町藤枝東田	平安	散布地
18	若松町遺跡	35012	五所川原市金木町芦野	平安	散布地
19	芦野(1)遺跡	35007	五所川原市金木町芦野	平安	散布地
20	沢部遺跡	35028	五所川原市金木町沢部	平安	散布地
21	芦野運動場遺跡	35019	五所川原市金木町芦野	縄文(後)、平安	散布地
22	金木館遺跡	35031	五所川原市金木町朝日山	中世	館跡
23	厩升村遺跡	35030	五所川原市金木町沢部	平安	散布地
24	藤枝瀬池南岸遺跡	35020	五所川原市金木町芦野	縄文(晩)、平安	散布地
25	金木遺跡	35023	五所川原市金木町芦野	縄文(前・後)	散布地
26	神明町遺跡	35022	五所川原市金木町芦野	縄文(後)、平安	集落跡
27	へび沢遺跡	35024	五所川原市金木町芦野	縄文(中・後)	散布地
28	芦野旧競馬遺跡	35009	五所川原市金木町芦野	縄文(中)	散布地
29	妻の神(1)遺跡	35010	五所川原市金木町芦野	縄文(前・中・後)	集落跡
30	妻の神(2)遺跡	35011	五所川原市金木町芦野	縄文(後)	散布地
31	大東ヶ丘遺跡	35027	五所川原市金木町川倉七夕野	縄文、平安	散布地
32	坂本(1)遺跡	35003	五所川原市金木町喜良市坂本	平安	散布地
33	岩見町遺跡	35026	五所川原市金木町喜良市坂本	縄文(中・晩)	散布地
34	坂本(2)遺跡	35029	五所川原市金木町喜良市坂本	平安	散布地
35	千刈(1)遺跡	35001	五所川原市金木町喜良市千刈	縄文(晩)、平安、近世	集落跡
36	千刈(2)遺跡	35041	五所川原市金木町喜良市千刈	平安	散布地
37	萩元遺跡	35033	五所川原市金木町嘉瀬萩元	平安	散布地
38	嘉瀬館(館ッコ)遺跡	35032	五所川原市金木町嘉瀬萩元	中世	館跡
39	雲雀野(1)遺跡	35035	五所川原市金木町嘉瀬雲雀野	縄文	散布地
40	鑽石(2)遺跡	35034	五所川原市金木町嘉瀬上端山崎	縄文、平安	散布地
41	雲雀野(2)遺跡	35017	五所川原市金木町嘉瀬雲雀野	平安	散布地
42	雲雀野(4)遺跡	35038	五所川原市金木町嘉瀬雲雀野	平安	散布地
43	雲雀野(3)遺跡	35037	五所川原市金木町嘉瀬雲雀野	縄文	散布地
44	嘉瀬(1)遺跡	35005	五所川原市金木町嘉瀬上端山崎	縄文(前)、平安	散布地
45	嘉瀬(2)遺跡	35036	五所川原市金木町嘉瀬上端山崎	縄文(前)、平安	散布地
46	鑽石(3)遺跡	35039	五所川原市金木町中柏木字鑽石	縄文	散布地
47	鑽石(4)遺跡	35040	五所川原市金木町中柏木字鑽石	縄文	散布地

## 第3章 検出遺構と出土遺物

### 第1節 平安時代

平安時代の遺構として、7棟の竪穴住居跡が検出された。いずれも形態は方形であり、平安時代にみられる壁溝を有する一般的な構造を呈している。以下各住居跡について詳述する。

#### 第1号・4号竪穴住居跡 (SI01・04)

【概要】グリッド AO・AP・AQ04,05,06 に位置し、第1号竪穴住居跡の後に第4号竪穴住居跡が構築されている。深く削平を受けており、床面及び壁溝のプランにより検出した。

長軸588cm、短軸571cmを測る方形を呈し、主軸方位はN-141°-Eである。第4号竪穴住居跡は、長軸351cm、短軸329cmを測る方形を呈し、主軸方位はカマドが検出されていないため不明であ

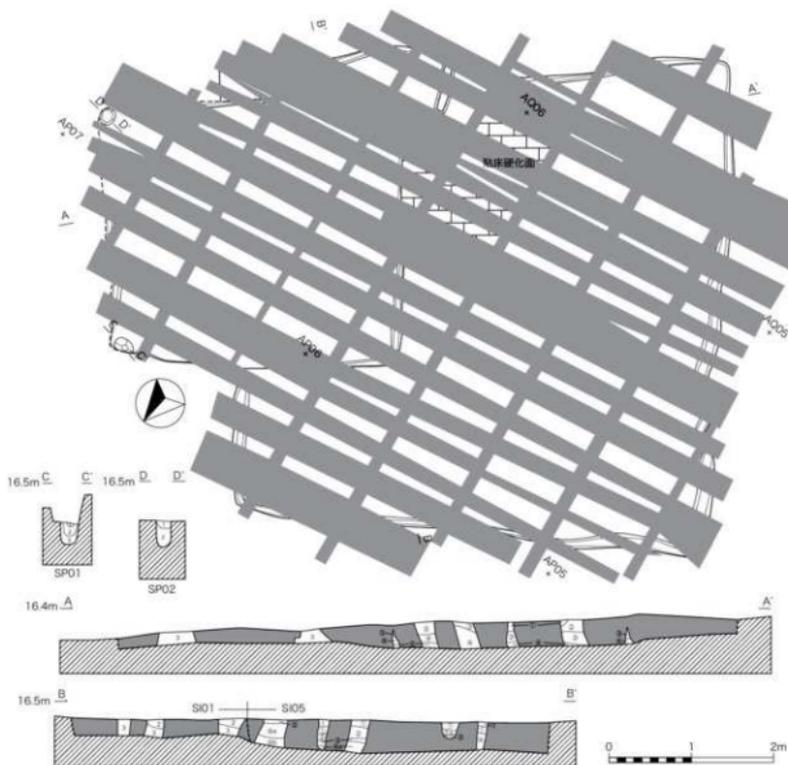


図3 SI01・SI04

表 2-1 SI01・04 土層観察表

SI01 土層観察表

層序	色調	土質	粘着	しまり	含有物
1層	10YR3/3 黒褐色	シルト	弱	弱	径 1mm 前後のローム粒をごく少量含む。
2層	10YR4/3 に近い黄褐色	シルト	中	中	径 1mm 前後のローム粒を少量含む。
3層	10YR4/6 褐色	シルト混土	中	中	径 10mm 前後のロームブロックを少量含む。

表 2-2 SI04SPO1・SPO2 土層観察表

SI04SPO1 土層観察表

層序	色調	土質	粘着	しまり	含有物
1層	10YR4/4 褐色	粘土混シルト	中	中	径 1mm 前後のローム粒を少量含む。
2層	10YR4/6 褐色	シルト	中	中	径 1mm 前後のローム粒を少量含む。
3層	10YR5/6 暗褐色	シルト	中	中	径 10mm 前後のロームブロックを少量含む。

SI04 土層観察表

層序	色調	土質	粘着	しまり	含有物
1層	10YR3/3 黒褐色	シルト	中	中	径 10～20mm のロームブロックを少量含む。
2層	10YR5/6 暗褐色	シルト	中	中	径 30mm 前後のロームブロックを多数含む。
3層	10YR4/3 に近い黄褐色	シルト	中	中	径 1mm 前後のローム粒を少量含む。
4層	10YR5/6 暗褐色	シルト混土	中	中	径 10～30mm のロームブロックを少量含む。

SI04SPO2 土層観察表

層序	色調	土質	粘着	しまり	含有物
1層	10YR4/3 に近い黄褐色	シルト	中	中	径 10～20mm のロームブロックを少量含む。
2層	10YR5/6 暗褐色	シルト	中	中	径 10mm 前後のロームブロックを少量含む。

るが、SI01 と同一の方位にカマドがついていたものと考えられ、N-136°-E である。

いずれの住居跡も削平されており、僅かに壁溝により確認することが可能であった。また、SI01 では、貼床と考えられる硬化した床面が一部確認された (図 3)。

【堆積状況】SI01 は埋土が 3 層確認され、1・2 層は、自然堆積層であると考えられる。ロームブロックの混入が多い 3 層は、人為的堆積層である可能性が高いと考えられる (表 2-1)。

SI04 の埋土は 4 層確認され、いずれの層もローム粒あるいはロームブロックを含む層であり、住居廃絶時に急速に堆積した層であると考えられる (表 2-2)。

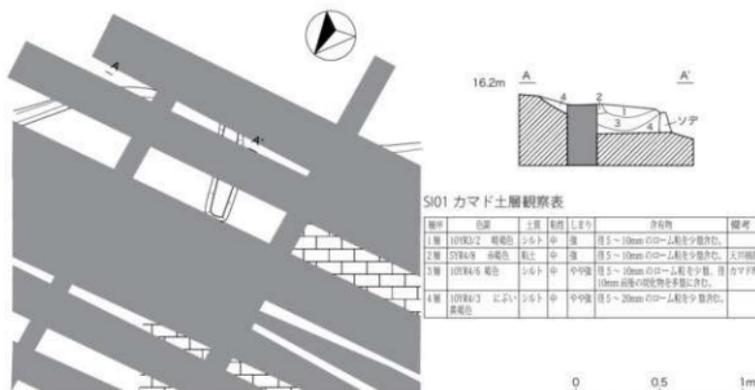


図 4 SI01 カマド

【カマド】ソデの一部と燃焼部が検出された。煙道部は削平されており残存していないが、その掘り込みが浅いことから、半地下式のカマドであると考えられる燃焼部のセクションでは、埋土は 4 層確認された。第 2 層は天井崩落土であり、その埋土中から土師器の甕が出土しており、カマド廃絶時に廃棄されたものと考えられる (図 4)。

【出土遺物】図 5 に遺物の出土状況を示す。これによると SI01 のカマド周辺と SI04 中央部付近に遺物の集中がみられる。しかし、遺物はトレンチャーにより破砕されており、資料化できた個体は 5 点である (図 6)。1 は土師器の甕の口縁であり、調整技法は内外面ともケズリ成形の後、ナデにより整形が施されている。2～5 は土師器の甕の底部であり、1 と同様の調整技法が施されている。

【時期】カマドの構造から考えて SI01・04 は 10 世紀第 3 四半期であると考えられる。

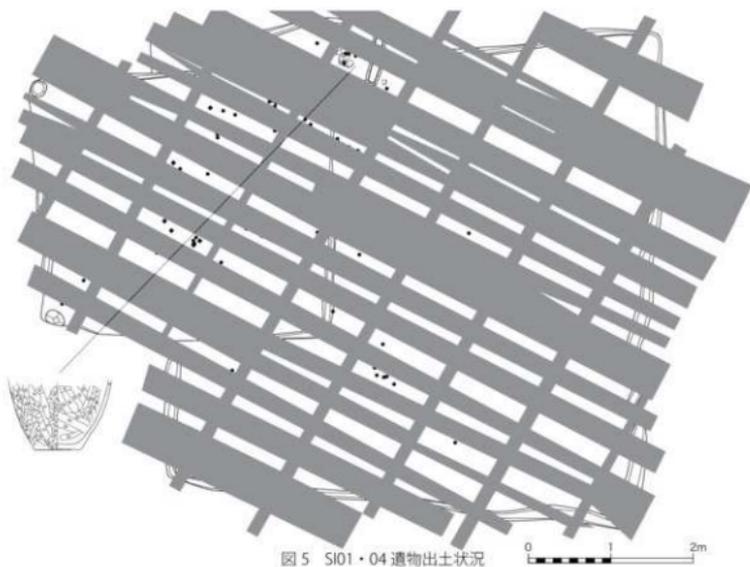


図5 SI01・04 遺物出土状況

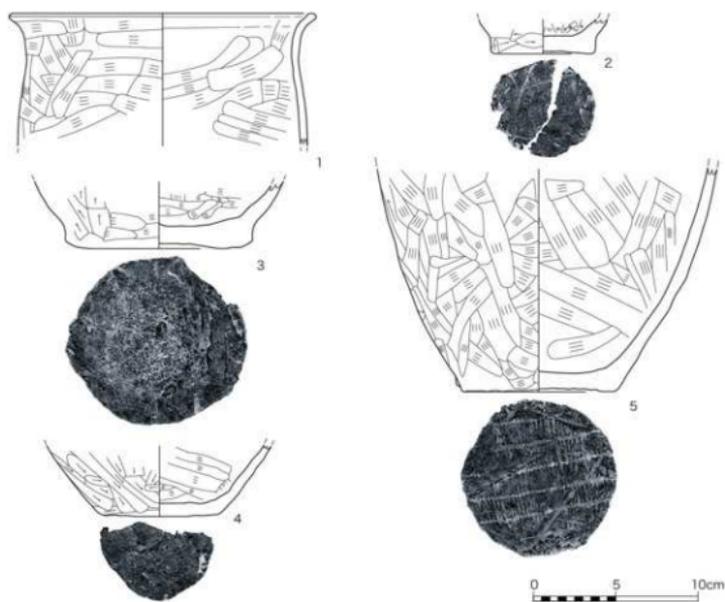
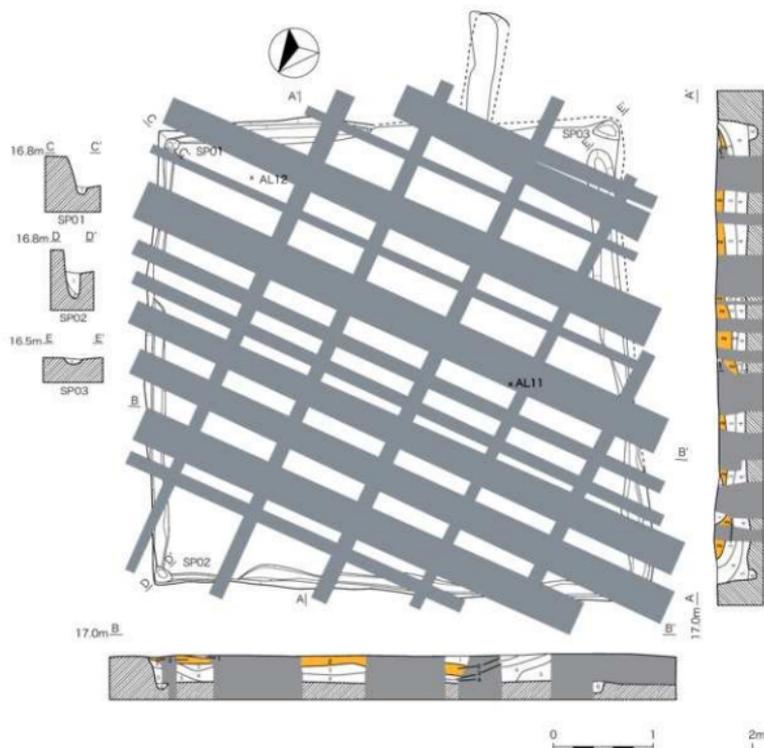


図6 SI01 出土遺物

## 第2号竪穴住居跡 (SI02)

【概要】グリッドAJ・AK・AL10、11、12に位置する。発掘時には既に試掘トレンチにより、南側の壁及びカマドは残存していなかった。各コーナには柱穴 (SP01～SP03) が認められ、壁溝も一部途切れているものの、全体を廻っているものと考えられる。長軸594.3cm、単軸548.7cmを測る方形を呈し、主軸方位はN-142°-Eである (図7)。



SI02 土層観察表

層序	色	土質	しまり	粘着	含有物
1層	10YR2/1 黄色	シルト	強	弱	径1～2mmのローム粒少量、径10mm程度のL.B.多数、径1～2mmの炭化物少量含む。
2層	5Y6/4 オリーブ黄褐色	灰	弱	弱	白磁土の土壌層。
3層	10YR5/2 灰黄褐色	砂質シルト	弱	弱	径1～2mmのローム粒少量、径10～20mmのL.B.多数、径1～2mmの炭化物少量、径1～2mmの粘土土粒少量、径10mm程度の焼土ブロック少量含む。
4層	10YR3/4 暗褐色	シルト	中強	中強	径1～2mmのローム粒少量、径10mm程度のL.B.少量、径1mm以下の粘土土粒多数含む。
5層	10YR4/6 褐色	粘土質シルト	中	中強	特になし、炭化物無し。
6層	10YR4/3 に近い黄褐色	粘土質シルト	中強	強	炭化物無し、径1～2mmのローム土粒少量、径10mm程度のL.B.少量、径1～2mmの炭化物少量含む。

SI02SP01 土層観察表

層序	色	土質	しまり	粘着	含有物
1層	10YR4/3 に近い黄褐色	粘土質シルト	弱	強	径1～2mmのローム粒少量、径1～2mmの炭化物少量含む。

SI02SP03 土層観察表

層序	色	土質	しまり	粘着	含有物
1層	10YR4/6 褐色	粘土質シルト	中	強	径1～2mmのローム粒少量含む。

SK02SP02 土層観察表

層序	色	土質	しまり	粘着	含有物
1層	10YR4/3 に近い黄褐色	粘土質シルト	弱	強	径1～2mmのローム粒少量、径10mm程度のL.B.少量、径1～2mmの炭化物少量含む。
2層	10YR5/6 黄褐色	シルト	中	中	径10mm程度のロームブロックを多数含む。

図7 SI02

【堆積状況】 埋土は6層確認され、1～4層は自然堆積層であり、2層には白頭山火山灰がベルト状に混入している。5層は壁の崩落土あるいは壁材を土留めしていた地山由来の層である。6層は壁溝埋土であり、5層同様地山由来の層である。

【カマド】 カマドは試掘時及びトレンチャーにより破壊されており確認できなかったが、煙道部の下場及び煙出部が僅かに残存していた。それによると、カマドは地下式であり、推定煙道長は135cm、残存する深さは45cmである。またカマドの燃焼部と推定される場所からは、支脚が出土している(図8)。

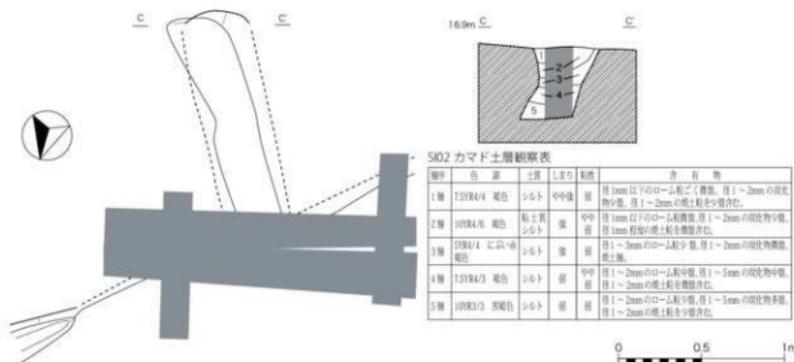


図8 SI02 カマド

【出土遺物】 図9に遺物の出土状況を掲載した。これによると遺物は、カマド周辺と北及び東の各コーナー付近に集中して出土している。いずれの遺物も白頭山火山灰の下で出土しており、10世紀第2四半期以前に帰属するものである。

出土した遺物は図10,11に掲載した。1・2はミニチュアの手づくね土器であり、1は内面はナデ調整によって丁寧な作られているが、外面には指圧痕の痕跡を多く留め、非常に粗雑な作りの壺型土器である。2は1とは異なる内外面ともに丁寧なナデ調整が施された杯型土器である。

3～10は、手づくねの内黒土器の杯であり、いずれも直上あるいは内湾する口縁である。内面はミガキ調整、外面はナデ調整やケズリ調整が施されているものが多いが、7はミガキ調整が施されている。

11～13はロクロ土器の杯であり、11は外湾する口縁である。12・13は杯の底部であるが、13の底部は回転糸切痕であり杯と判断したが、器厚が厚いため土器の小型壺の可能性も考えられる。

14～17は土器の小型壺であり、14・15はロクロ成形、16・17は非ロクロ成形である。調整は内面がナデ調整、外面はナデ調整やケズリ調整が施されている。14は外面に被熱を受けて剥落しており、15・16は内面口縁部付近に煤が付着している。

図11の1は土器の長胴壺の口縁から体部にかけてであり、ロクロ成形後、内面はナデ、外面はケズリ調整が施されている。2～4は土器の壺の体部から底部にかけての破片であり、内面はナデ、

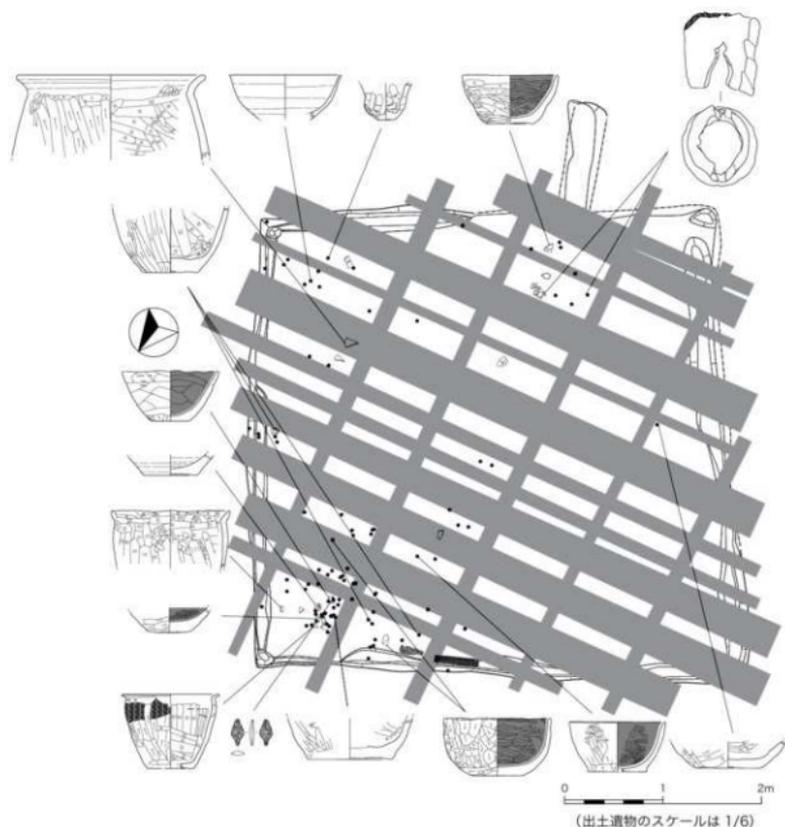


図9 S102 遺物出土状況

外面はケズリ調整が施されている。5は、カマドの支脚であり、上部が欠損しているが、筒状の形を呈し、設置面には2カ所にハの字状の切り込みがみられる。内面には粘土の輪積みの痕跡が明瞭に認められる。

6は、この住居跡とは時期が異なり、縄文時代の頁岩製の石鏃が出土している。先端部が欠損している。周辺の包含層では縄文時代の土器も数点出土していることから、住居廃絶時に流れ込んできたものと考えられる。

【時期】 白頭山火山灰の堆積状況から10世紀第1～2四半期であると考えられる。

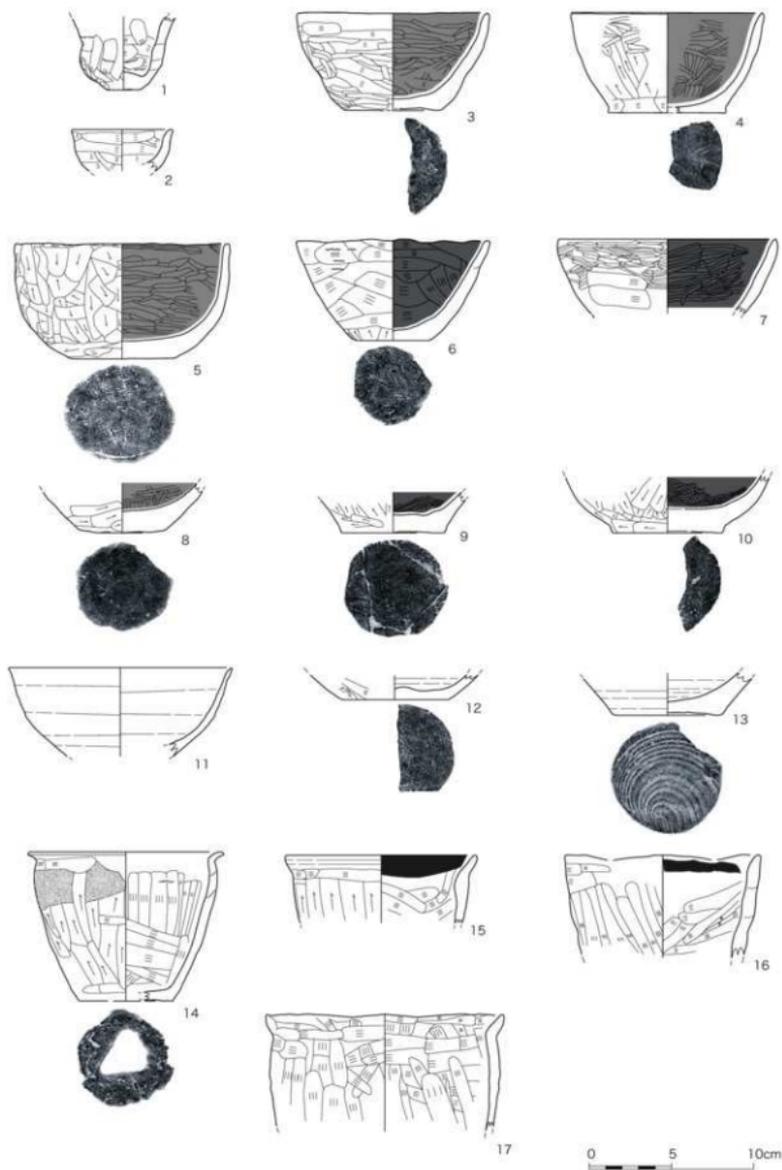


図10 SiO2出土遺物(1)

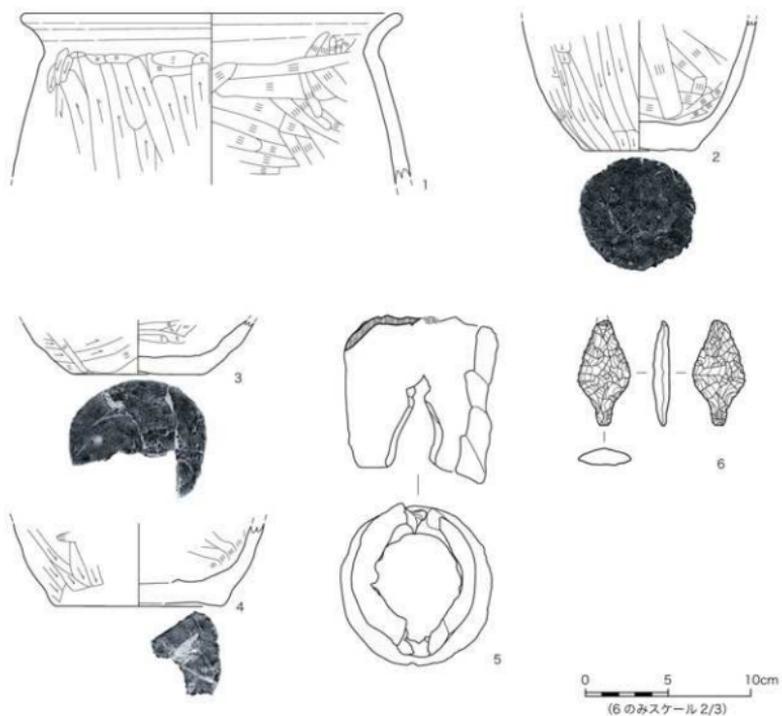


図11 S102 出土遺物 (2)

## 第3号竪穴住居跡 (SI03)

【概要】 グリッド AK・AL・AM・AN04,05,06,07 に位置する。後述するように10mを超える巨大

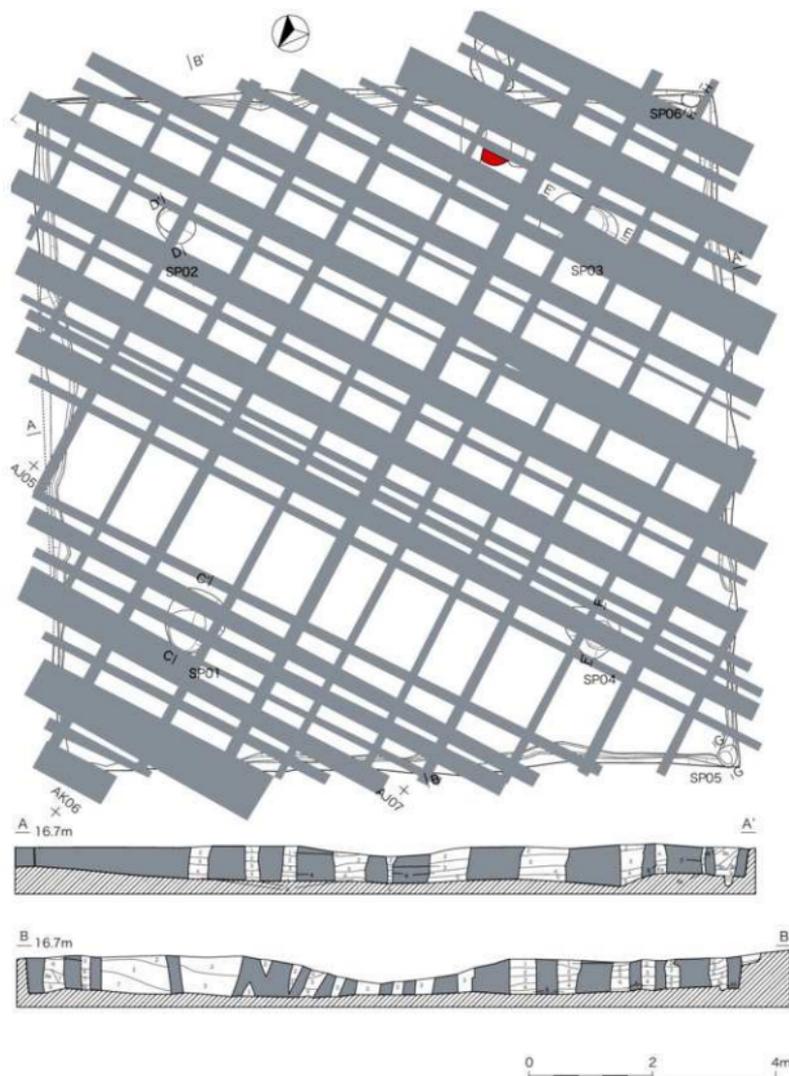
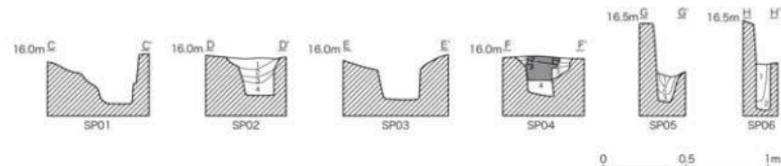


図 12 SI03

表3 S103 土層観察表

層序	色 調	土 質	粘性	しまり	含有物
1層	10YR3/3 黒褐色	シルト	やや弱	中	特になし。
2層	10YR3/2 黒褐色	シルト	中	中	特になし。
3層	10YR3/1 黒色	シルト	中	中	特になし。
4層	10YR2/2 黒褐色	シルト	中	やや弱	特になし。
5層	10YR2/3 黒褐色	シルト	中	やや弱	特になし。
6層	10YR4/6 褐色	シルト	中	中	特になし。
7層	10Y5/4 にごり黄褐色	シルト	中	中	径 5mm 前後のローム粒を微量含む。
8a層	10YR4/4 褐色	シルト	中	中	径 5mm ~ 50mm のローム粒及びロームブロックを多量に含む。
8b層	10YR4/4 にごり黄褐色	シルト	中	弱	径 5mm ~ 20mm のローム粒及びロームブロックを少量含む。
8c層	10YR4/4 褐色	シルト	中	弱	径 5mm ~ 10mm のローム粒を少量含む。
9層	10YR3/4 黒褐色	シルト	中	やや弱	径 5mm ~ 10mm のローム粒を少量含む。
10層	10YR3/4 黒褐色	シルト	やや弱	やや弱	径 1 ~ 2mm のローム粒を少量、径 1 ~ 2mm の炭化物を微量含む。



S103SP02 土層観察表

層序	色 調	土 質	しまり	粘性	含有物
1層	10YR3/2 黒褐色	シルト	強	やや強	径 1 ~ 2mm のローム粒中量、径 1 ~ 5mm の炭化物少量、径 1 ~ 3mm の炭土粒を少量含む。
2層	10YR4/4 褐色	シルト	やや強	やや弱	径 1 ~ 2mm のローム粒微量、径 10mm 程度のL.B.少量、径 1 ~ 2mm の炭化物を微量含む。
3層	10YR4/6 褐色	シルト質粘土	弱	強	径 1 ~ 2mm のローム粒中量、径 10 ~ 30mm のL.B.少量、径 1 ~ 2mm の炭化物を微量含む。
4層	7.5YR4/4 褐色	シルト質粘土	弱	強	径 1 ~ 3mm のローム粒中量、径 10 ~ 30mm のL.B.少量、径 1 ~ 3mm の炭化物を微量含む。

S103SP04 土層観察表

層序	色 調	土 質	しまり	粘性	含有物
1層	10YR2/1 黒色	シルト	やや強	弱	径 1 ~ 2mm のローム粒少量、径 1mm 程度の炭化物を微量含む。
2層	10YR3/2 黒褐色	シルト	強	やや強	径 2 ~ 5mm のローム粒少量、径 1mm 程度の炭化物を微量含む。
3層	10YR4/6 褐色	シルト質粘土	やや強	強	径 1 ~ 5mm のローム粒少量、径 1 ~ 2mm の炭化物を微量含む。
4層	10YR5/4 にごり黄褐色	粘土質シルト	やや強	やや強	径 1 ~ 5mm のローム粒中量、径 10 ~ 30mm のL.B.中量、径 1 ~ 2mm の炭化物を微量含む。

S103SP05 土層観察表

層序	色 調	土 質	しまり	粘性	含有物
1	10YR4/6 褐色	シルト	弱	中	径 1 ~ 10mm のローム粒を中量、径 2mm 程度の炭化物を微量含む。
2	10YR4/4 褐色	シルト	やや弱	弱	径 2 ~ 15mm のローム粒を中量、径 2mm 程度の炭化物を微量含む。

S103SP06 土層観察表

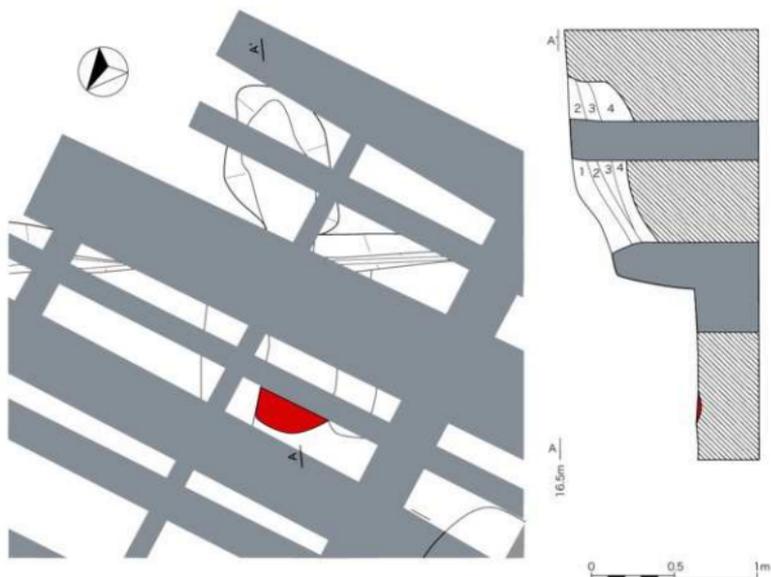
層序	色 調	土 質	しまり	粘性	含有物
1	7.5YR4/4 褐色	シルト	やや弱	中	径 2 ~ 15mm のローム粒を中量、径 1 ~ 3mm の炭化物を微量含む。
2	10YR5/8 黄褐色	シルト質粘土	やや強	弱	径 50 ~ 100mm のロームブロックを中量含む。
3	10YR4/6 褐色	シルト	やや弱	中	径 1 ~ 3mm のローム粒を多量、径 1 ~ 5mm の炭化物を微量含む。

図13 S103 柱穴セクション図

な堅穴住居跡であり、その上屋を支えるための主柱穴が4基（SP01～SP04）、各コーナに伴う壁柱穴が2基（SP05・06）確認された（図13）。周囲には壁溝が廻るものの、その深さは通常の堅穴住居跡ときほど変わらない深さである。しかし、堆積土をみると、壁を内側から押さえていたと考えられる地山由来の層が多量に堆積していたため、これにより壁板を支えていたものと考えられる。床面の硬化度は低く、また一部は整地した後、貼り床がなされない場所も存在した（図12）。

【規模】長軸1108cm、短軸1104cmを測る。カマドの主軸方位はN-139°-Eである。

【堆積状況】埋土は全部で10層確認され、1層～5層までは腐植土層である黒色土を主体とした自然堆積層であり、混入物は特に確認されなかった。6層から9層は壁付近に堆積していた地山主体の層であり、壁板を押さえるための土及び壁の崩落土である可能性が高いと考えられる。10層は住居跡壁面に確認された掘り込み面の層と酷似していることから、壁面崩落土であると考えられる（表3）。



S103 カマド土層観察表

層序	色 調	土質	粘性	しまり	含 有 物	備考
1層	10YR4/6 褐色	シルト質粘土	やや強	強	径1mm以下のローム粒微量、径1mm以下の炭化物微量、径1~2mmの焼土粒微量、粘土ブロックを多量に含む。	天井崩落土
2層	5YR4/4 に近い赤褐色	シルト	弱	強	径1~2mmの炭化物を少量含む。	焼土層
3層	7.5YR3/3 暗褐色	シルト	やや強	弱	径1~2mmのローム粒少量、径1~2mmの炭化物微量、径1~2mmの焼土粒を中量含む。	
4層	7.5YR4/ 褐色	シルト	強	弱	径1~3mmのローム粒少量、径10~30mmのLP多量、径1~5mmの炭化物多量、径1~3mmの焼土粒を少量含む。	
5層	5YR4/4 に近い赤褐色	シルト	やや強	中	径1~2mmのローム粒少量、径1~2mmの炭化物微量を含む。	燃焼部

図14 S103 カマド

【カマド】 南壁東よりに位置し、ソデは破壊されており、わずかにソデの痕跡が確認される程度であった。煙道部のつくりは半地下式であり、天井に粘土を高架していたものと考えられる。僅かに燃焼部が確認されたが、被熱をあまり受けておらず軟質であった。またカマドの規模は普通の住居とあまり変化はみられなかった。埋土は全部で4層確認され、1層が粘土を主体とする天井崩落土であり、2層が、焼土層である。また火焼面も確認されたが、被熱を受けている面は深さ約3cm程度であり、被熱の度合いも弱いことから、あまり使用されてはいなかったことが窺える（図14）。

【出土遺物】 図15に遺物の出土状況を掲載した。これによると、カマド周辺と東コーナー付近に遺物の集積が認められる。また、散逸的であるが住居中央付近からSPO1付近にかけて遺物の出土が認められる。

図16の1・2はロクロ成形の坏の体部～底部破片であり、底部は回転糸切離し後無調整である。3～5は土師器の小型甕であり、3は手づくね、4・5はロクロで成形されている。いずれも口縁部がやや外彎し、体部はあまり張り出さない器形である。外面にはケズリ調整、内面にはナデ調整が施されている。6・7は土師器の長胴甕であり、6は口縁部が大きく外反し、体部は殆ど張り出さない器形である。7は口縁部が外側に屈曲し、張り出した体部で最大径を有する器形である。いずれも口

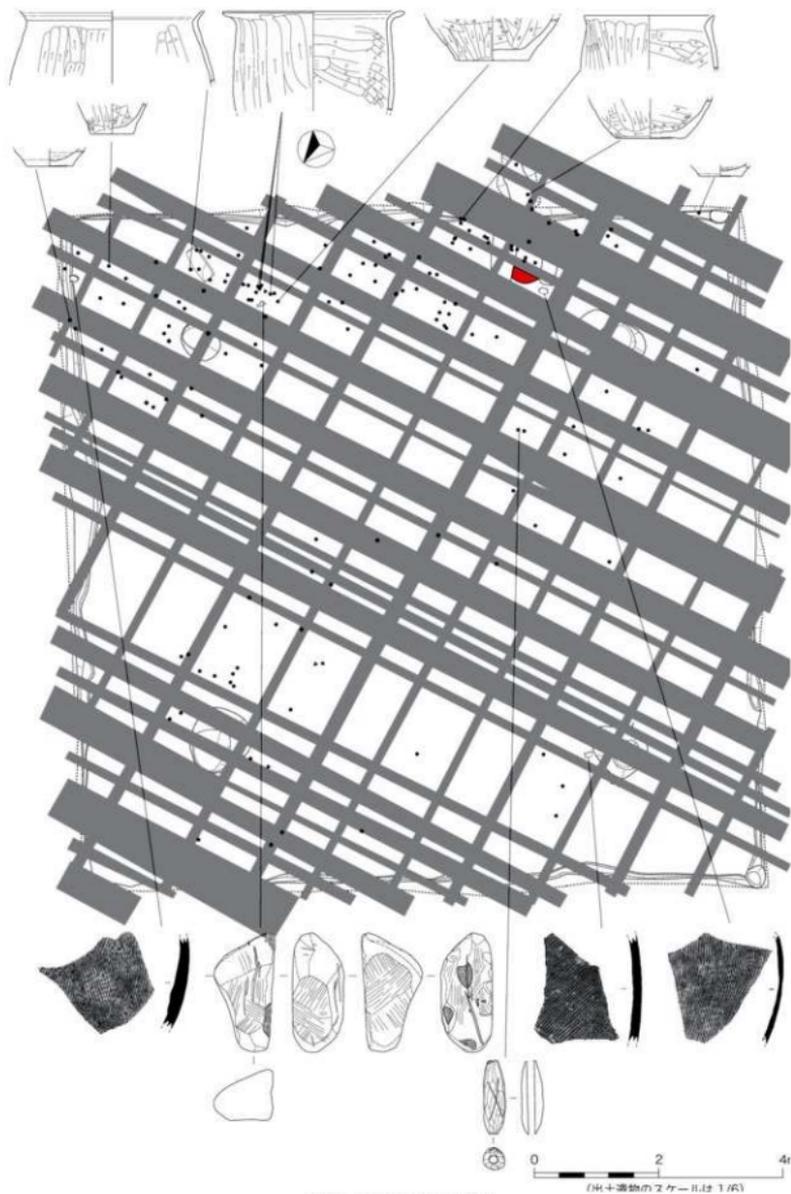


図15 SI03 遺物出土状況

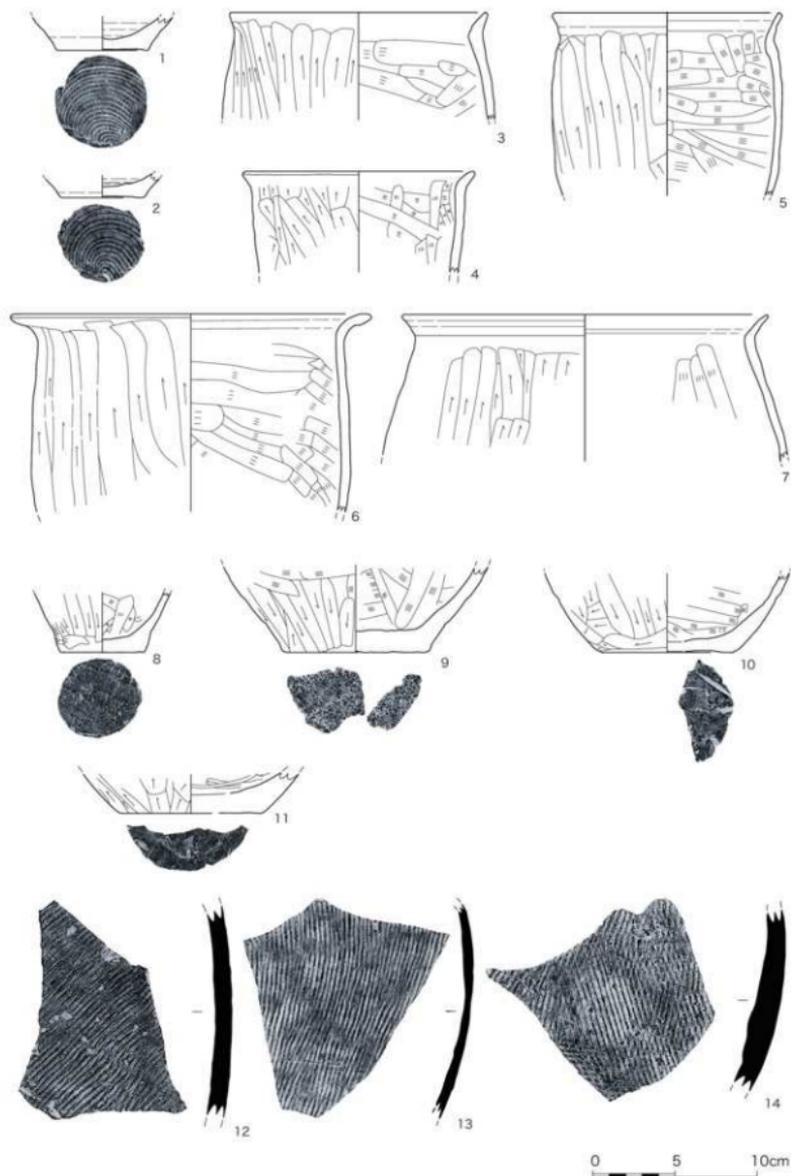


図16 SI03出土遺物(1)

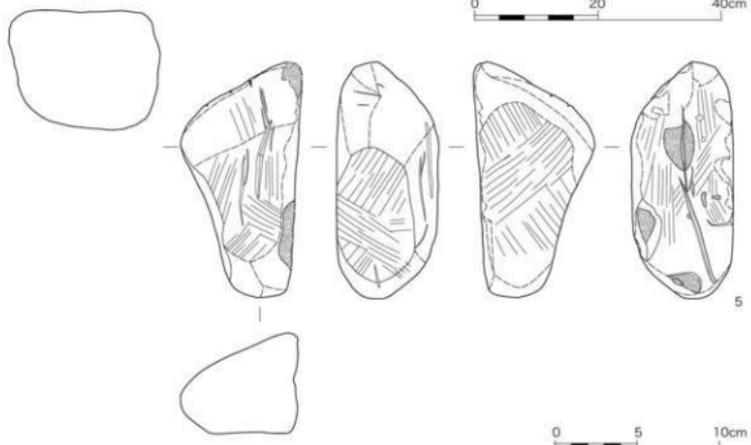
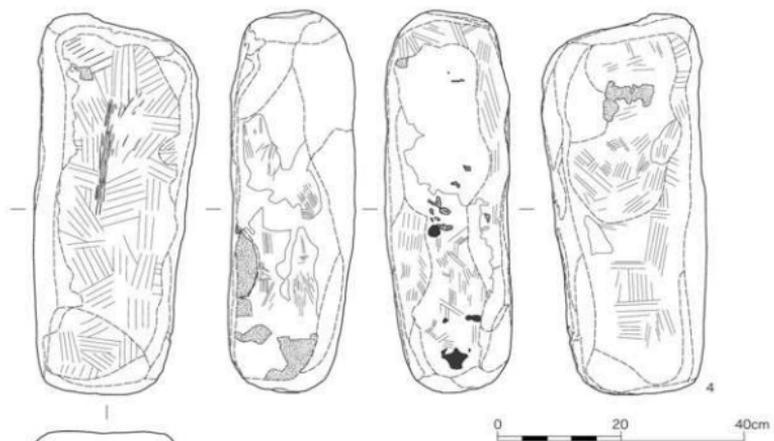
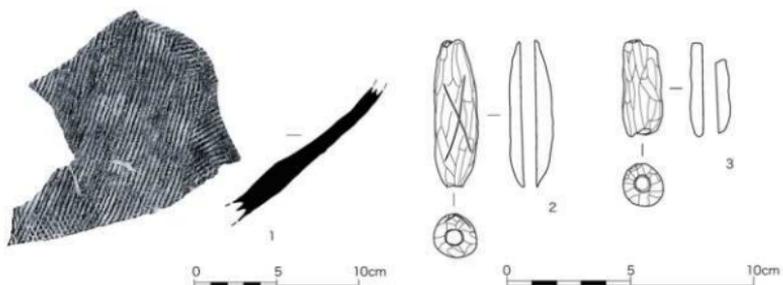


図17 S103 出土遺物(2)

クロ成形後、外面にはケズリ調整、内面にはナデ調整が施されている。8～11は甕の底部であり、8・9は底面にケズリ調整が施されている。11の底面は砂底である。いずれも外面にはケズリ調整（8・9はナデ調整もある）、内面にはナデ調整が施されている。

図16の12・13は須恵器の甕の体部破片、14・図17の1は底部破片である。いずれも外面には叩き成形であり、内面の当て具痕は不明瞭なことから、円盤状の当て具が使用されたものと考えられる。

2・3は土錘であり、2には「×」のヘラ記号がみられる。いずれも外面にはナデ調整が認められる。

4・5は、住居跡東隅で出土した砥石である。4は4面に無数の擦痕が確認され、金属器の刃部によって穿たれたと考えられる細長い溝状の痕跡も認められる。持ち運ぶことが困難であると考えられることから、常時住居内で使用されていたものと考えられる。

5は小型の砥石であり、擦痕が微かにしか認められず、擦面が光沢を帯びていることから、仕上げ砥として使用されていたものと考えられる。前述した砥石と隣接して出土しており、併用されていたものと考えられる。

**【時期】** 住居跡北西部の谷地形に白頭山火山灰が堆積しており、その火山灰が遺構構築面の下層で確認されているため、10世紀中葉以降であると考えられる。

## 第5号竪穴住居跡 (SI05)

【概要】グリッド AM10、AN・AO09,10,11、AP10,11 に位置する。規模は長軸 662cm、短軸 639cm を測り、方形を呈する。カマドの主軸方位は  $N-136^{\circ}-E$  である。ほぼ周囲に壁溝が巡り不定の位置に柱穴 SP01～06 が確認された (図 18)。

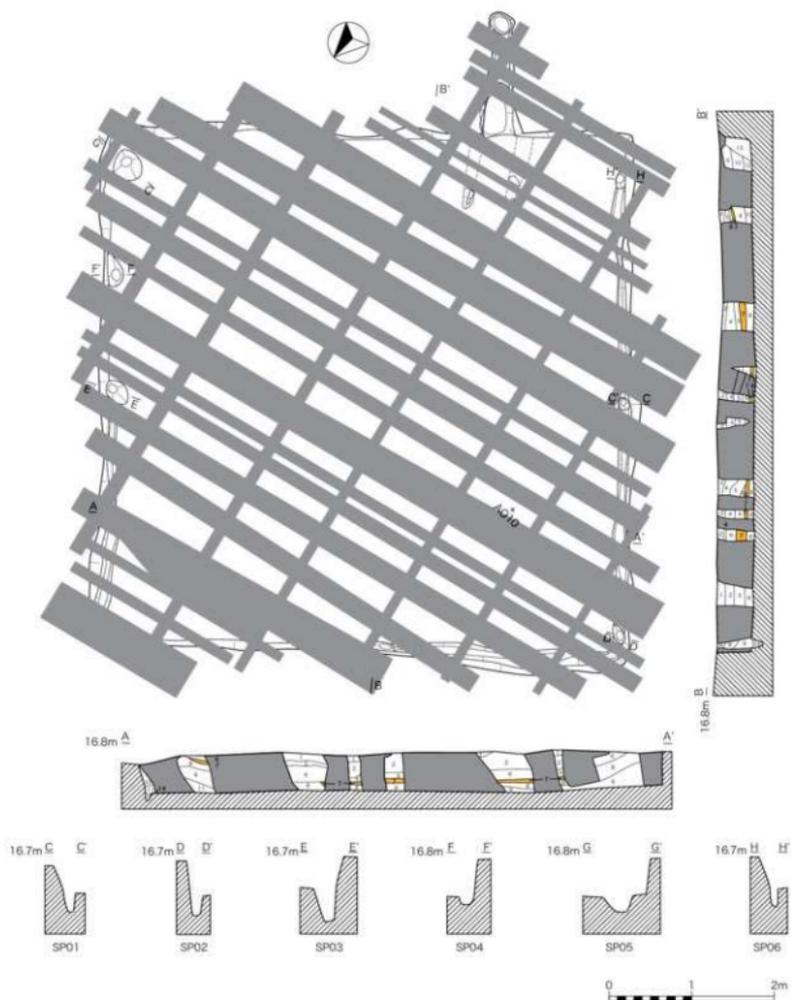
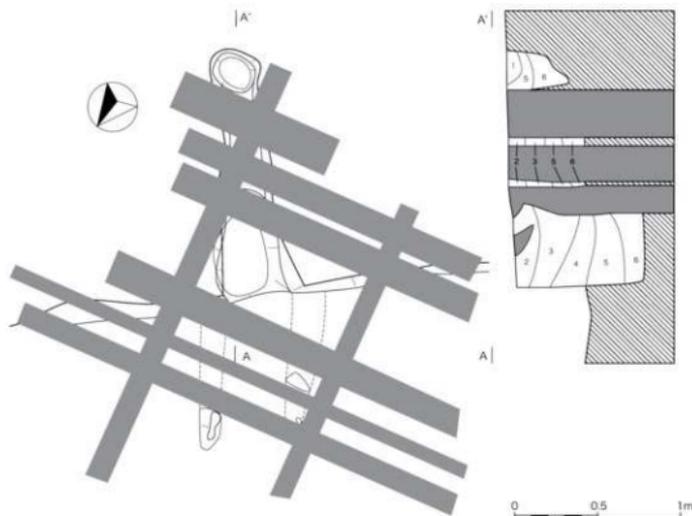


図 18 SI05

表4 S105土層観察表

層序	色調	土質	粘性	しまり	含有物	備考
1層	10YR2/2 黒褐色	シルト	中	やや強	径1～5mmの炭化物を微量含む。	
2層	10YR3/2 黒褐色	シルト	中	強	径1～5mmの炭化物を微量含む。	
3層	10YR2/1 黒色	シルト	中	弱	径1～5mmの炭化物を少量、径2mm程度の焼土粒を少量含む。	
4層	10YR4/4 褐色	シルト	中	強	B-Tmをブロック状に少量含む。	B-Tm 二次堆積層
5層	10YR5/6 暗褐色	シルト	中	強	B-Tmをブロック状に少量含む。	B-Tm 二次堆積層
6層	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	中	強	B-Tmをブロック状に少量、径5～10mmのローム粒を微量含む。	B-Tm 二次堆積層
7層	5Y6/4 オリーブ黄褐色	泥	弱	弱	物に乏し。	B-Tm層
8層	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	中	やや弱	径1～10mmの炭化物を微量、径5～10mmのローム粒を微量含む。	
9層	10YR5/4 にぶい黄褐色	シルト	中	やや強	径5mm程度のローム粒、径10～30mmのロームブロックを少量含む。	
10層	10YR3/3 暗褐色	シルト	中	やや強	径10mm前後のロームブロックを少量含む。	
11層	10YR5/6 暗褐色	シルト	中	強	径5mm程度のローム粒、径10～30mmのロームブロックを多量に含む。	
12層	10YR3/3 暗褐色	シルト	中	やや弱	径5mm程度のローム粒を微量含む。	
13層	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	中	強	径5mm程度のローム粒、径10～20mmのロームブロックを少量に含む。	
14層	10YR4/6 褐色	シルト	中	やや弱	径5mm程度のローム粒、径10～20mmのロームブロックを少量に含む。	埋溝埋土

【堆積状況】 埋土は14層確認された。1～6層は自然堆積層であり、3～5層は白頭山火山灰の二次堆積層であり、6層は白頭山火山灰の一次堆積層である。7～9、11層は地山を主体とした住居崩壊直後に堆積した層であり、人為、自然堆積層の区別はつかなかった。10・12層は住居の壁が崩落した時に堆積した層であり、壁際に堆積している。13層は壁板を支えていたと考えられる地山主体の層である。14層は壁溝の埋土である（表4）。



S105 カマド土層観察表

層序	色調	土質	粘性	しまり	含有物	備考
1層	10YR3/2 黒褐色	シルト	中	中	径5mm前後の焼土粒を少量含む。	
2層	10YR5/6 黄褐色	シルト	中	中	径10mm前後の粘土ブロックを少量含む。	天井崩壊土
3層	10YR6/6 明黄褐色	シルト質粘土	中	強	径10～50mm程のにぶい黄褐色（10YR7/4）粘土ブロックを多量に含む。	天井崩壊土
4層	10YR4/2 灰黄褐色	シルト質砂	弱	弱	径1～5mmの焼土粒を多量、径20mm程の粘土ブロックを中量含む。	
5層	10YR3/3 明黄褐色	シルト	弱	弱	径1～5mmの焼土粒を多量、径20mm程の粘土ブロックを中量含む。	
6層	10YR3/2 黒褐色	シルト	弱	弱	径1～5mmの焼土粒を多量、径20mm前後の焼土ブロックを中量、径1～2mm程の炭化物を少量含む。	

図19 S105 カマド

【カマド】 カマドはソデ部分は除去されており、僅かに粘土の痕跡が確認された。煙道部は地下式であり、煙出部に向かって緩やかに立ち上がり、煙出部でピット状に深くなる構造である。

埋土は6層確認され、1層は自然堆積層、2・3層は天井崩落土、4～6層はカマド残存時と天井崩落前に堆積した層であり、焼土及び炭化物が多く含まれる(図19)。

【出土遺物】 遺物の出土状況は、散逸的であるが、住居跡の中心付近にまとまって出土している傾向が窺える(図20)。

図21の1は、土師器の坏であり、底部には回転糸切痕が残る。内外面ともにロクロ成形である。2・

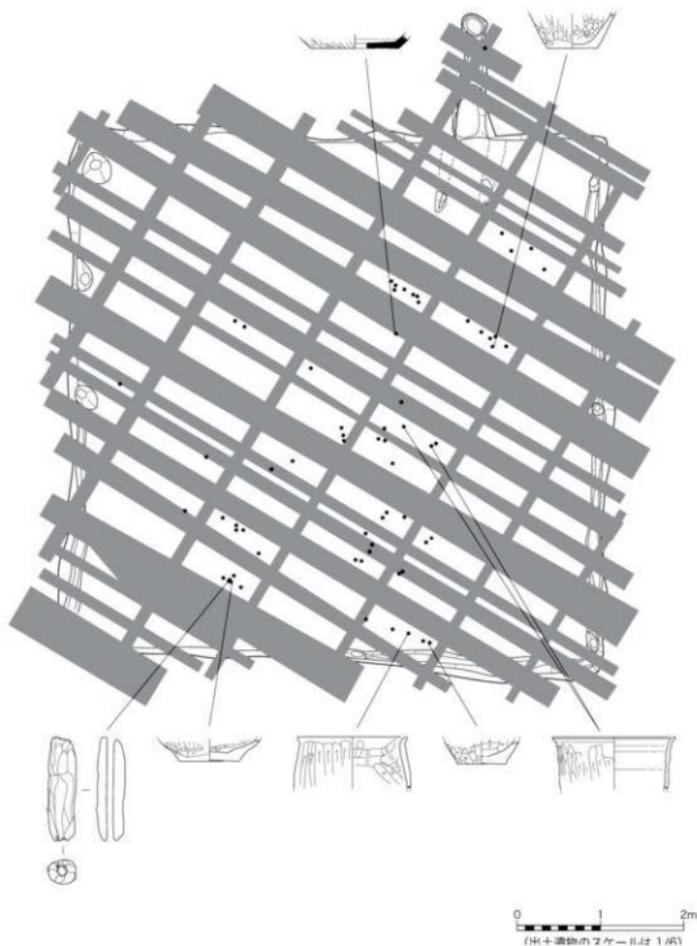


図20 SIOS 遺物出土状況

3は土師器の小型甕であり、2は非ロクロであり、外面はケズリ調整、内面はナデ調整が施されている。3は、ロクロ成形の後、外面はケズリ調整が施されている。4～6は土師器甕の底部破片であり、4・5はケズリ底、6は砂底無調整である。いずれも外面にはケズリ調整、内面にはナデ調整が施されている。7・8は須恵器の壺であり、ロクロ成形の後、外面にはケズリ調整が施されている。9・10は土錘であり、いずれも第3号竪穴住居跡出土の土錘と同様にナデ調整が施されている。

【時期】 白頭山火山灰の堆積状況から、10世紀第2四半期であると考えられる。

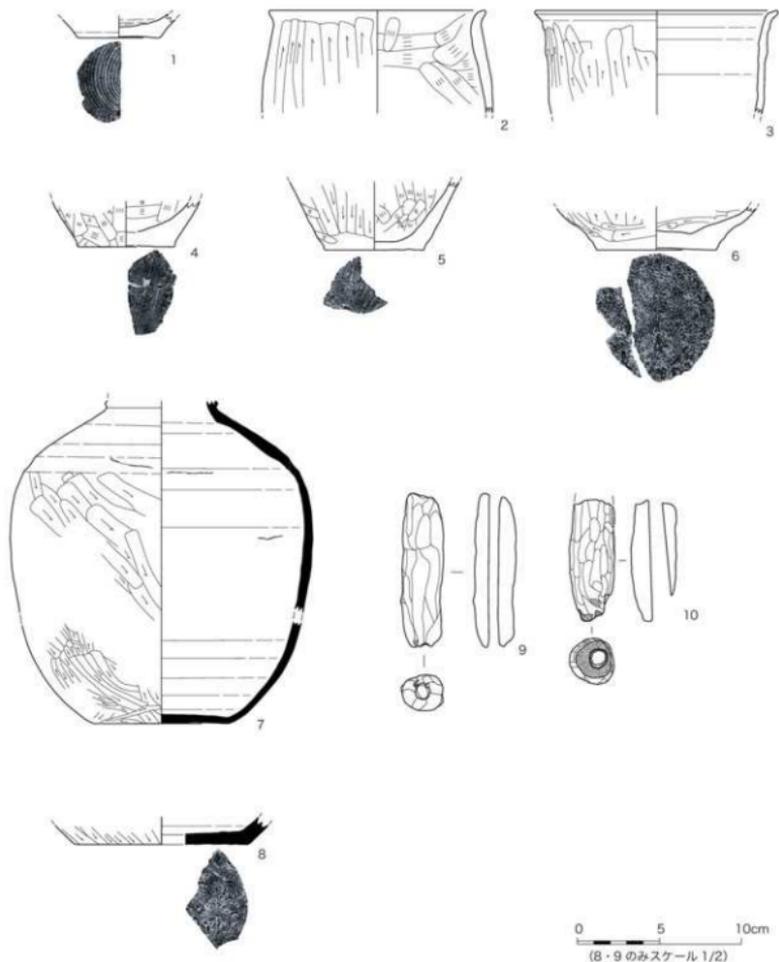


図 21 SI05 出土遺物

## 第6号竪穴住居跡 (SI06)

【概要】 グリッド AI・AJ・AK08,09,10 に位置し、長軸 808cm、短軸 728cm を測り、方形を呈する。カマドの主軸方位は  $N-138^{\circ}-E$  である。周囲に壁溝が廻っているが、その壁溝中から壁板と考えられる炭化材がほぼ全周にわたって検出された。また壁溝中及び床面から多量の焼土が検出されてお

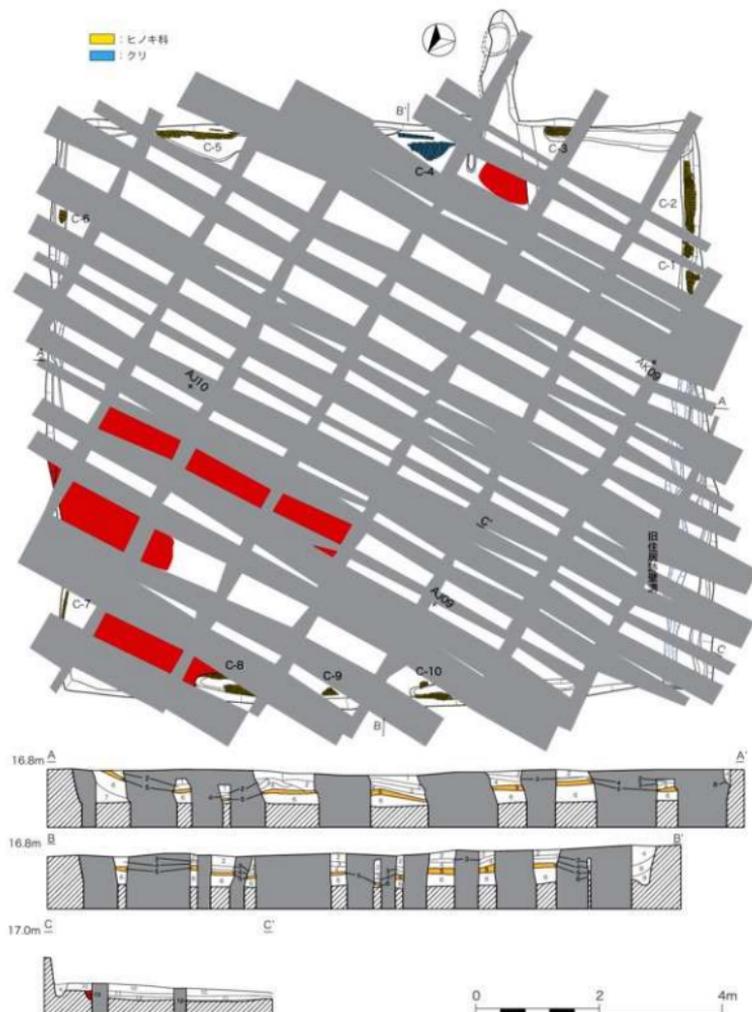
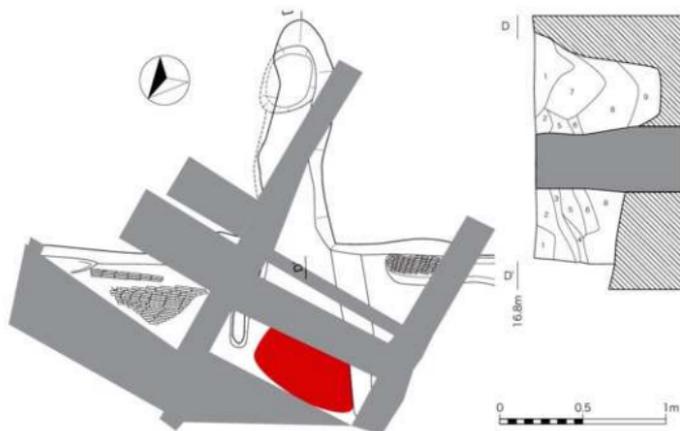


図 22 SI06

表6 SI06土層観察表

層序	色調	土質	粘性	しまり	含有物	備考
1層	10YR3/2 黒褐色	シルト	弱	やや弱	径1～3mmのローム粒少量、B-Tmを多量に含む。	B-Tm 二次堆積層
2層	10YR3/3 暗褐色	砂質シルト	やや強	やや弱	径1～2mmのローム粒中量、径1mm前後の炭化物少量、B-Tmを多量に含む。	B-Tm 二次堆積層
3層	10YR3/4 暗褐色	シルト	弱	やや弱	径1mm前後のローム粒少量、径1～2mmの炭化物少量、B-Tmを多量に含む。	B-Tm 二次堆積層
4層	10YR3/3 暗褐色	シルト	やや弱	やや弱	径1～3mmのローム粒少量、径1～3mmの炭化物少量、B-Tmを多量に含む。	B-Tm 二次堆積層
5層	10YR4/2 灰黄褐色	灰	弱	やや弱	径1～2mmの炭化物を微量に含む。	B-Tm 層
6層	10YR3/4 暗褐色	シルト	やや強	弱	径1～5mmのローム粒中量、径3～5mmの炭化物中量、径1～2mmの焼土粒を少量含む。	
7層	10YR3/3 暗褐色	シルト	やや強	やや弱	径1～3mmのローム粒少量、径1～9mmの炭化物多量、径2～3mmの焼土粒を少量含む。	
8層	10YR4/4 褐色	砂質シルト	やや強	弱	径1～5mmのローム粒多量、径10～20mmのLB多量、径1～2mmの炭化物を微量に含む。	
9層	10YR3/4 暗褐色	シルト質粘土	やや弱	弱	径1～9mmのローム粒少量、径1～2mmの炭化物多量、径1～2mmの焼土粒を中量含む。	新任居塚埋土
10層	10YR4/3 に近い黄褐色	粘土質シルト	強	強	径1～9mmのローム粒多量、径1～3mmの炭化物中量、径1～3mmの焼土粒を少量、B-Tm少量含む。	新任居塚面
11層	10YR3/4 暗褐色	シルト	やや弱	強	径1～9mmのローム粒多量、径10mm前後のLB多量、径1～9mmの炭化物多量、径1～3mmの焼土粒を少量含む。	炭化物層
12層	10YR2/3 黒褐色	シルト	やや強	やや強	径1～2mmのローム粒少量、径1～3mmの焼土粒多量、径1～9mmの炭化物を多量に含む。	前任居塚面
13層	5YR5/8 明赤褐色	シルト	弱	弱	特になし。	焼土層、前任居塚埋土



SI06 カマド土層観察表

層序	色調	土質	粘性	しまり	含有物	備考
1層	10YR3/3 暗褐色	シルト	弱	中	径1～5mmの炭化物少量、径1mm前後の焼土粒を少量含む。	
2層	10YR3/2 黒褐色	シルト	中	弱	径1mm前後の炭化物少量、径1～3mmの焼土粒を少量含む。	
3層	10YR4/3 に近い黄褐色	シルト	中	弱	径1～5mmの焼土粒を多量に含む。	
4層	10YR3/2 黒褐色	シルト	弱	強	径10mm前後の焼土ブロックを多量に含む。	
5層	10YR5/6 黄褐色	粘土質シルト	中	特になし。		大井竈体土
6層	10YR5/8 黄褐色	粘土	中	強	特になし。	大井竈体土
7層	10YR3/1 黒褐色	シルト	弱	弱	径1～9mmの炭化物多量、径1～9mmの焼土粒を多量に含む。	
8層	10YR3/2 黒褐色	シルト	弱	弱	径1～7mmのローム粒多量、径1～9mmの炭化物中量、径1～9mmの焼土粒を多量に含む。	
9層	10YR3/1 黒褐色	シルト	弱	弱	径1～9mmの炭化物多量、径1～9mmの焼土粒を多量に含む。	

図23 SI06カマド

り、当住居跡は焼失家屋であると考えられ、特にスロープ状に床面が高くなっている入口部分であると考えられる北隅部分での被熱が強く、ここが出火場所であると考えられる。また住居跡西側には床下より、被熱を受けた床面と壁溝（図中の青い部分）が検出されており、1回焼失にあった後拡張していることが確認された。検出された炭化材は1点がクリ材であるほかは、ヒノキ科の木材が使用されていた（第4章参照）。

【堆積状況】埋土は全部で13層確認された。1～4層は白頭山火山灰の二次堆積層であり、プロッ

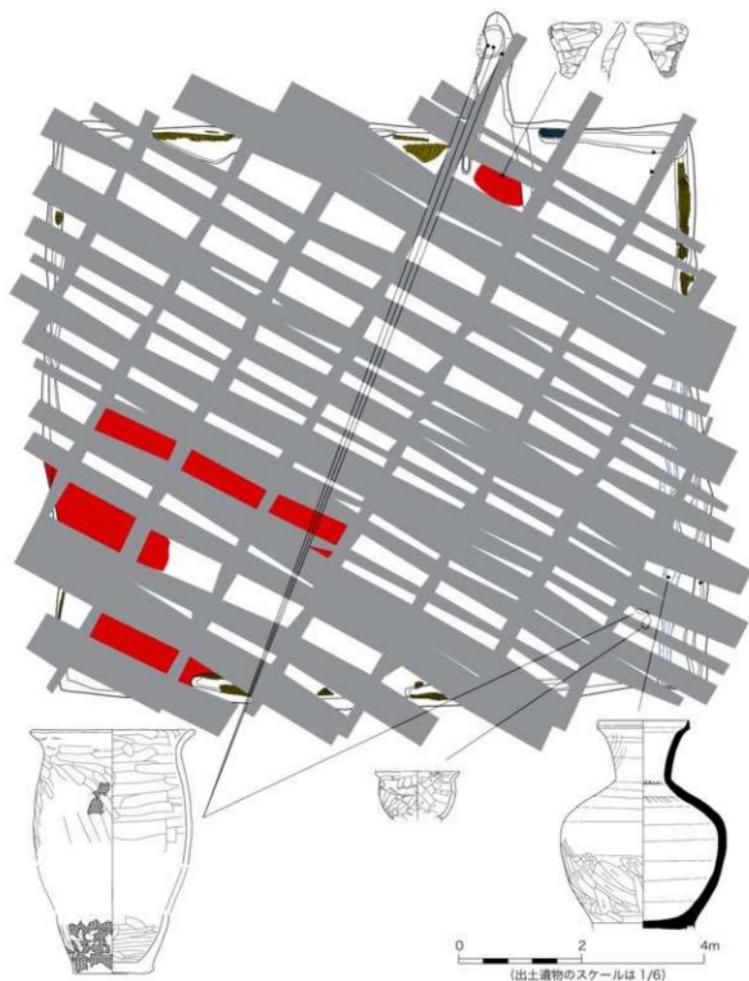


図24 S106 遺物出土状況

ク状に混入が認められた。5層は白頭山火山灰層である。6層は床面直上の層である。7・8層は壁際の層であり、壁面崩落土の可能性が高いと考えられる。9・13層は壁溝埋土であり、前者が新住居、後者が旧住居に帰属する。10・12層は貼床層であり、前者が新住居、後者が旧住居である（表6）。【カマド】 ソデは破壊されていて、僅かに粘土の痕跡を残すのみであった。地下式の煙道部であり、底面は煙出部にかけて緩やかに下がり、最深部を煙出部に有する。

埋土は全部で9層確認され、1～4・7層が天井崩落後の自然堆積層5・6層が天井崩落土、8・9層が廃棄直後の堆積層である（図23）。

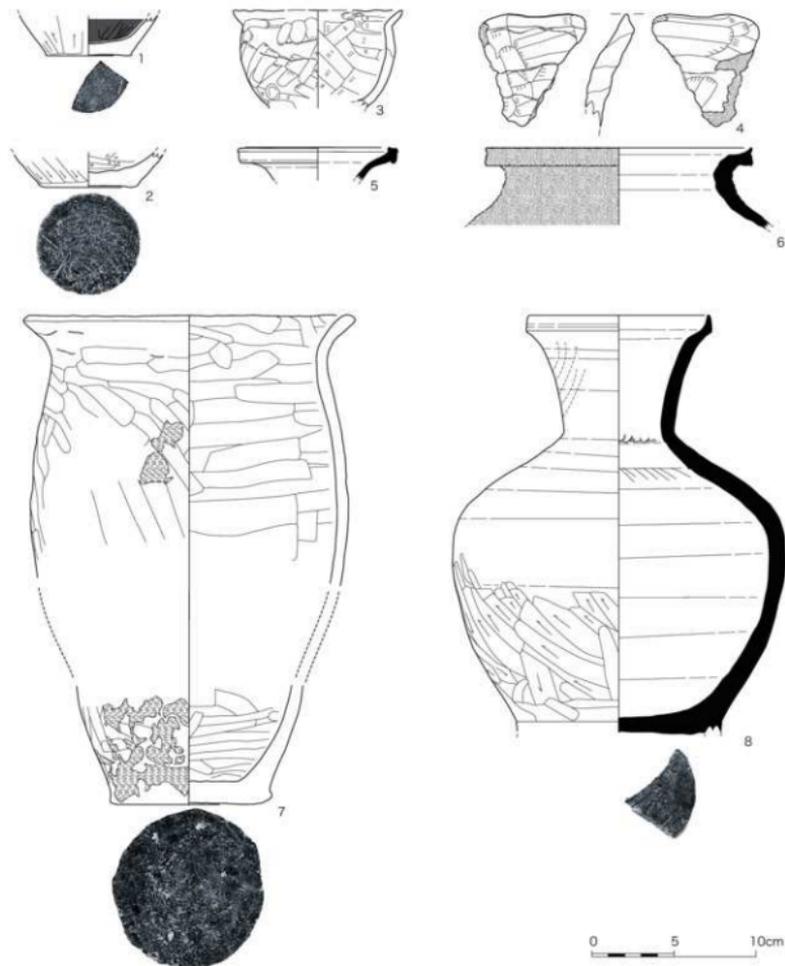


図25 S106 出土遺物

【出土遺物】 遺物の出土量は少なく、カマド周辺と旧住居跡の壁溝内から出土している（図24）。

図25の1・2は土師器の坏の底部である。1は外面はケズリ調整、内面は黒色処理が施された後、ミガキ調整が施されている。底面は無調整である。2は外面がケズリ調整、内面はナデ調整が施されている。底面は回転糸切り離し後無調整である。3は土師器の小型甕（鉢）であり、内外面ともにナデ調整が施されている。4は土師器の鍋の口縁部であり、内外面ともに輪積み痕が明瞭であり作りは粗雑である。調整は内外面ともにナデ調整が施されている。内外面ともに非常に被熱を受けており、器面が脆弱になっている。7は土師器の長胴甕であり、体部下半がトレンチャーにより完全に欠落している。内外面ともにナデ調整が施され、外面には被熱への耐用度を高めるためか粘土が貼付けられている。

5・8は須恵器の長頸壺であり、前者は五所川原産の前期2期の長頸壺であり、10世紀第2四半期の年代が想定される。8は調整技法は外面にケズリ調整が施される点は五所川原産須恵器と同様であるが、高台の底面に菊花文が施されていないことと、胎土が異なる点から非五所川原産である可能性が高いと考えられる。6は土師器の広口壺であり、被熱により内外面が剥落しており住居焼失時に廃棄されたものと考えられる。

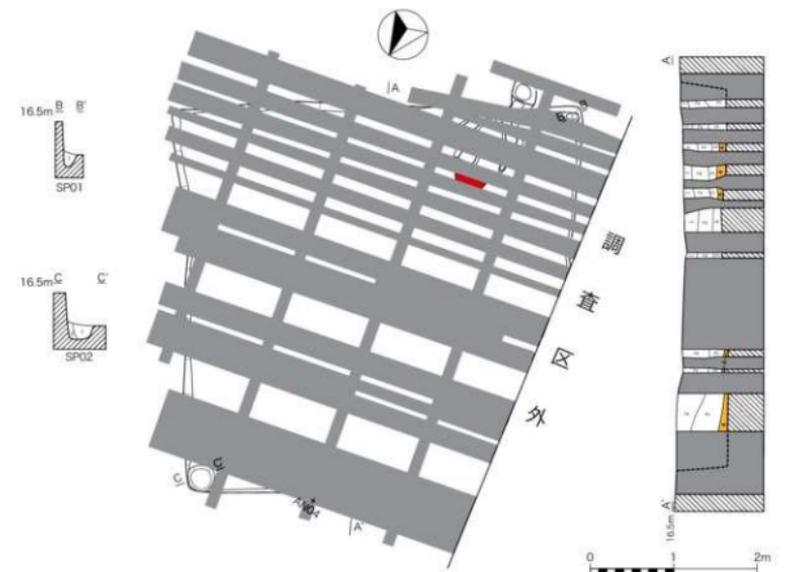
【時期】 白頭山火山灰の堆積状況や、出土遺物から10世紀第2四半期であると考えられる。

## 第7号竪穴住居跡

【概要】 グリッド AM04, AN03・04・05, A003・04 に位置し、一部が調査区外に延びているため、正確な規模は不明であるが、一辺 480cm を測る方形を呈するものと考えられる。カマドの主軸方位は  $N-146.5^{\circ}-E$  である。壁溝は確認できず、柱穴 SP01・SP02 が確認された (図 26)。

【堆積状況】 埋土は全部で 4 層確認され、床面直上に白頭山火山灰が確認された。1 層から 3 層は、混入物が少ないことから自然堆積層であると考えられる。

【カマド】 カマド付近は攪乱がひどかったもののソデが確認できた。煙道部及び煙出部は、削平されており、僅かに痕跡が認められる程度であった。カマドの埋土は 3 層確認され、1・2 層は自然堆積層、3 層は天井崩落土であると考えられる。但し、ソデの位置と煙道部の位置に整合性がとれないため、トレンチャーの影響で、東方向にソデが移動しているものと考えら、現位置を留めているとは考えられない。



SI07 土層観察表

層序	色調	土質	粘性	しまり	含有物	備考
1層	10YR5/3 に近い黄褐色	シルト	弱	中	径 1～3mm のローム粒を中量含む。	
2層	10YR4/3 に近い黄褐色	シルト	弱	中	径 1～10mm のローム粒を中量含む。	
3層	10YR4/4 褐色	シルト	中	中	径 1～5mm のローム粒少量。径 5m 前後の炭化物を少量含む。	
4層	10YR4/2 灰褐色	灰	弱	弱	特になし。	B-Tm 層

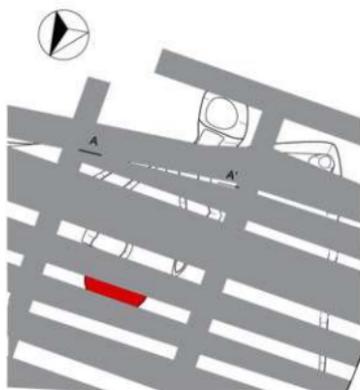
SI07SP01 土層観察表

層序	色調	土質	粘性	しまり	含有物
1層	10YR4/4 褐色	シルト	中	中	径 1～5mm のローム粒を少量含む。

SI07SP02 土層観察表

層序	色調	土質	粘性	しまり	含有物
1層	10YR4/4 褐色	シルト	中	中	径 1～5mm のローム粒を少量含む。
2層	10YR4/6 褐色	シルト	中	強	径 1～5mm のローム粒を中量、径 1～5mm の炭化物を少量含む。

図 26 SI07

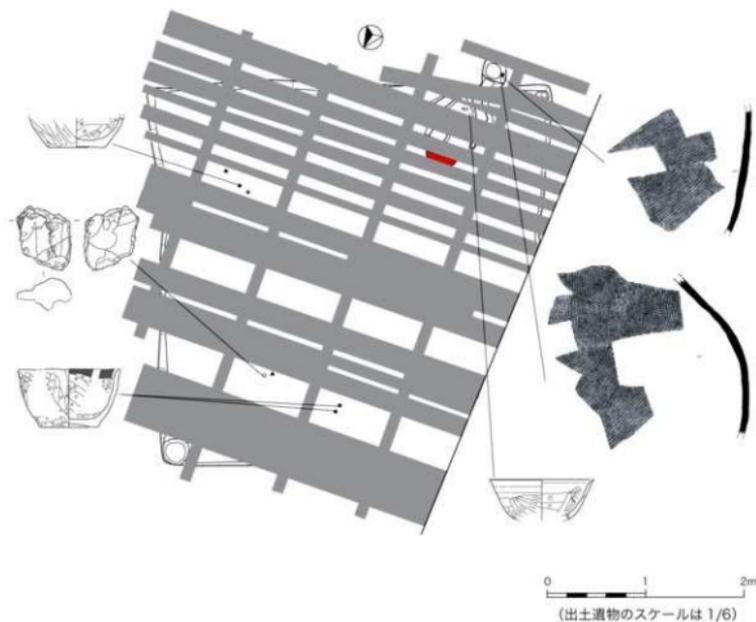


SI07 カマド土層観察表

層序	色 澤	土 質	粘 着	し ま り	含 有 物
1層	10YR3/2 暗褐色	シルト	弱	弱	径 1mm 程度以下の粘土片散在。
2層	10YR4/3 に近い 黄褐色	シルト質粘土	中	中	径 約 1-2mm の粘土ブロックや丸、径 30mm 程度の 土ブロックや丸、径 1mm 程度の磁石片散在。
3層	10YR4/4 褐色	シルト	中	中	径 20mm 程度の粘土ブロックを多数、径 1mm 程度の 磁石片散在。



図 27 SI07 カマド



(出土遺物のスケールは 1/6)

図 28 SI07 遺物出土状況

【出土遺物】 図27に遺物の分布状況を示した。遺物の出土量は少なく、カマドの支脚と考えられる環が出土している。カマドの煙出部からは、蓋として使用されたと考えられる須恵器甕の体部破片が出土している。その他に羽口が2点出土している。

図28の1はカマドの燃焼部から出土した坏である。粘土紐巻き上げの後ロクロ成形がなされ、外面の体部下半にケズリ調整が施され、内面にはナデ調整が施されている。2の坏は手づくねで成形された後、内外面にはナデ調整が施されている。3は土師器甕の底部であり、外面にはケズリ調整、内面にはナデ調整が施されている。

4・5は須恵器甕の体部破片であり、前述したカマド煙出部から出土している。外面には格子状あるいは平行にタキ締められており、内面には円礫状の当具痕が確認された。

6・7は羽口の破片資料であり、いずれも実測図上端部にガラス成分が溶解したものが付着している。

【時期】 床面直上に白頭山火山灰が堆積しているため、10世紀第2四半期であると考えられる。

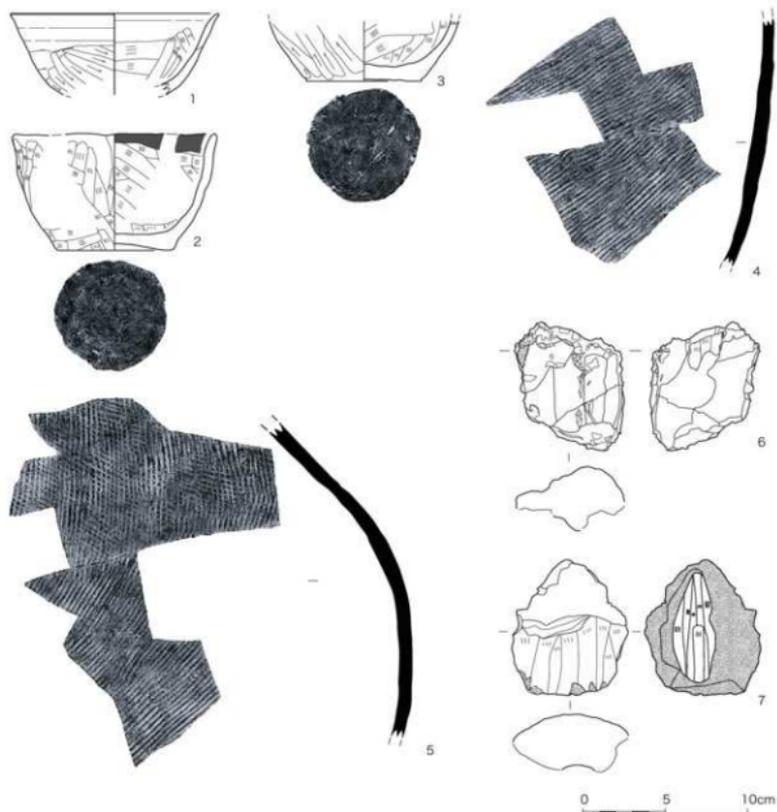


図29 SI07出土遺物

## 第2節 遺構外の出土遺物

遺構外からは縄文時代と古代の遺物が出土している。ここでは資料化可能な個体を掲載した(図4-28)。

## 1. 縄文時代

縄文時代の遺物として晩期の台付き鉢形土器の台部が出土している。台部下方は沈線が施された後、下端を折り返し、折り返し面にLR縄文が施されている。

## 2. 古代

古代の遺物としては主として土錘が多く出土している。いずれも住居跡で出土した土錘と同様で、いずれも外面にナデ調整が施されている。完形のは少なく(3・4・6)、端部が欠損しているものが多い。また、被熱を受けているものも見られる(11)。

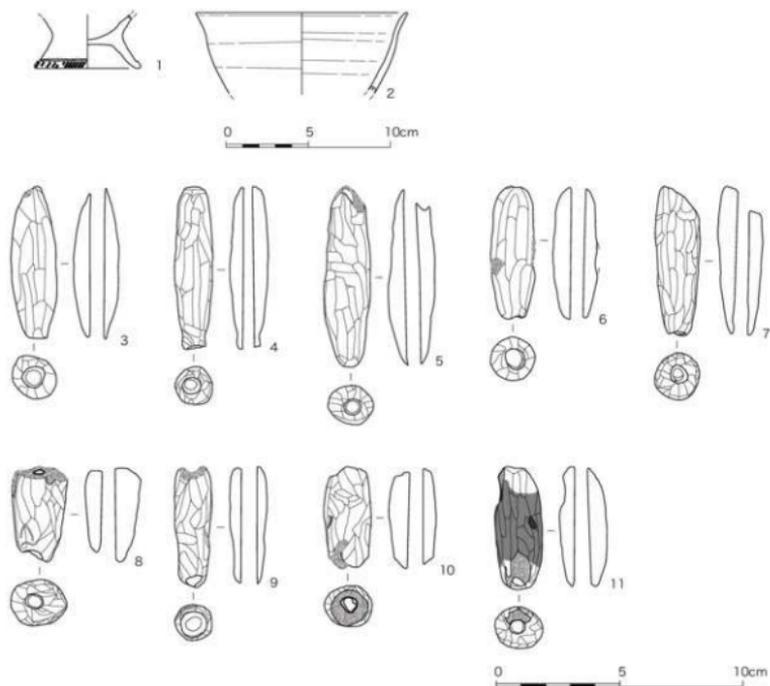


図30 遺構外出土遺物

表7-1 出土遺物観察表(1)

図版No.	列/F	遺構名	層位	大別	器種	残存部位	法量			外面調整	内面調整	底部調整	焼成状況	備考	
							口径	器高	直径						
図6-1	AQ04	S01	1床面	土師器	甕	RNS	18.4	—	—	ナデ、ケズリ	ロクロ、ナデ	—	焼成数貫		
図6-2	AQ04	S01	1床面	土師器	甕	BF	—	—	6.0	ケズリ	ナデ	ケズリ	焼成数貫		
図6-3	AP05	S01	埋土2層	土師器	甕	BF	—	—	10.2	ケズリ、ナデ	ナデ	無調整	焼成数貫	砂底	
図6-4	—	S01	1床面	土師器	甕	BF	—	—	7.1	ナデ、ケズリ	ナデ	ナデ	焼成数貫		
図6-5	AP06	S01	ケヤク1層	土師器	甕	BF	—	—	9.2	ナデ、ケズリ	ナデ	無調整	焼成数貫	底部硝子付着	
図10-1	AK12	S02	埋土4層	土師器	ミニ	SBF	—	—	1.9	ナデ	ナデ	ナデ	焼成数貫		
図10-2	AL11	S02	1床面	土師器	ミニ	RB	6.2	—	—	ナデ	ナデ	—	焼成数貫		
図10-3	AL11	S02	1床面	土師器	杯	RF	11.6	5.9	5.8	ナデ、ミガキ	ミガキ、ナデ	ナデ	焼成数貫	内面黒色処理	
図10-4	AK11	S02	埋土4層	土師器	杯	RF	11.6	6.1	7.0	ミガキ、ケズリ、ナデ	ミガキ	ケズリ	焼成数貫	内面黒色処理	
図10-5	AK11	S02	埋土2層	土師器	杯	RF	12.9	7.0	6.2	ケズリ、ナデ	ミガキ	ケズリ	焼成数貫	内面黒色処理	
図10-6	AK11	S02	埋土4層	土師器	杯	RF	11.7	6.0	5.4	ナデ、ケズリ	ナデ	ナデ	焼成数貫	内面黒色処理	
図10-7	AK11	S02	埋土2層	土師器	杯	RB	13.1	—	—	ミガキ、ナデ	ミガキ	—	焼成数貫	内面黒色処理	
図10-8	AK11	S02	埋土2層	土師器	杯	BF	—	—	5.2	ケズリ	ミガキ	無調整	焼成数貫	内面黒色処理	
図10-9	AK11	S02	埋土2層	土師器	杯	BF	—	—	6.4	ケズリ	ミガキ	ナデ	焼成数貫	内面黒色処理	
図10-10	—	S02	埋土4層	土師器	杯	BF	—	—	6.4	ケズリ	ミガキ	ナデ	焼成数貫	内面黒色処理	
図10-11	AK12	S02	埋土4層	土師器	杯	RB	13.4	—	—	ロクロ	ロクロ	—	焼成数貫		
図10-12	AK11	S02	埋土3層	土師器	杯	BF	—	—	6.4	ナデ	ロクロ	両面黒	焼成数貫		
図10-13	AK11	S02	埋土4層	土師器	杯	BF	—	—	6.2	ロクロ	ロクロ	両面黒	焼成数貫		
図10-14	AK11	S02	埋土2層	土師器	小型甕	RNSB	11.8	9.1	5.6	ナデ、ケズリ	ナデ	無調整	焼成数貫	外面硝子	
図10-15	—	S02	埋土3層	土師器	小型甕	RNS	11.3	—	—	ロクロ、ケズリ、ナデ	ナデ	—	焼成数貫	内面硝子保層付着	
図10-16	AK12	S02	1床面	土師器	小型甕	RS	11.8	—	—	ナデ	ナデ	—	焼成数貫	内面硝子保層付着	
図10-17	AK11	S02	埋土2層	土師器	小型甕	RNS	14.2	—	—	ナデ	ナデ	—	焼成数貫		
図11-1	AK12	S02	1床面	土師器	甕	RNS	22.2	—	—	ロクロ、ナデ、ケズリ	ロクロナデ	—	焼成数貫		
図11-2	AK11	S02	埋土4層	土師器	小型甕	BF	—	—	6.9	ケズリ	ナデ	ケズリ	焼成数貫		
図11-3	AL11	S02	1床面	土師器	甕	BF	—	—	7.9	ケズリ、ナデ	ナデ	無調整	焼成数貫		
図11-4	AK11	S02	埋土2層	土師器	甕	BF	—	—	10.2	ケズリ	ナデ	無調整	焼成数貫		
図11-5	AL11	S02	1床面	土師器	支脚	BF	—	—	7.4	無調整	無調整	無調整	焼成数貫	中空	
図16-1	AL07	S03	土師器	杯	BF	—	—	—	5.4	ロクロ	ロクロ	両面黒	焼成数貫		
図16-2	AN06	S03	1床面	土師器	杯	BF	—	—	5.0	ロクロ	ロクロ	両面黒	焼成数貫		
図16-3	AN06	S03	1床面	土師器	小型甕	RNS	15.6	—	—	ケズリ	ナデ	—	焼成数貫		
図16-4	—	S03	埋土4層	土師器	小型甕	RNS	13.8	—	—	ケズリ	ナデ	—	焼成数貫		
図16-5	AK09	S03	ケヤク1層	土師器	小型甕	RNSB	13.6	—	—	ロクロ、ケズリ	ナデ	—	焼成数貫		
図16-6	AM07	S03	1床面	土師器	甕	RNS	22.0	—	—	ロクロ、ケズリ	ロクロ、ナデ	—	焼成数貫		
図16-7	AM06	S03	埋土5層	土師器	甕	RNS	22.1	—	—	ロクロ、ケズリ	ロクロ、ナデ	—	焼成数貫		
図16-8	AM07	S03	1床面	土師器	甕	BF	—	—	5.1	—	ナデ	ケズリ	焼成数貫		
図16-9	AM07	S03	1床面	土師器	甕	BF	—	—	8.6	ケズリ、ナデ	ナデ	無調整	焼成数貫	砂底	
図16-10	AN06	S03	1床面	土師器	甕	BF	—	—	8.0	ケズリ	ナデ	ケズリ	焼成数貫		
図16-11	AK05	S03	埋土4層	土師器	甕	BF	—	—	8.7	ケズリ	ミガキ	ケズリ	焼成数貫	内面黒色処理	
図16-12	AL04	S03	埋土2層	実直器	甕	B	—	—	—	平行タタキ	円錐状写留	—	還元焼貫		
図16-13	AN06	S03	埋土4層	実直器	甕	B	—	—	—	平行タタキ	円錐状写留	—	還元焼貫		
図16-14	AK05	S03	埋土4層	実直器	甕	BF	—	—	—	平行タタキ、壺子タタキ	円錐状写留	壺子タタキ	還元焼貫		
図17-1	AL07	S03	埋土4層	実直器	甕	BF	—	—	—	平行タタキ、壺子タタキ	円錐状写留	壺子タタキ	還元焼貫		
図21-1	AO09	S05	埋土2層	土師器	杯	BF	—	—	5.1	ロクロ	ロクロ	両面	焼成数貫		
図21-2	AO09	S05	埋土2層	土師器	小型甕	RNS	12.9	—	—	ケズリ	ナデ	—	焼成数貫		
図21-3	AO10	S05	埋土1層	土師器	小型甕	RNS	14.7	—	—	ロクロ、ケズリ	ロクロ	—	焼成数貫		
図21-4	AO09	S05	埋土2層	土師器	甕	BF	—	—	6.8	ナデ、ケズリ	ナデ	ケズリ	焼成数貫		
図21-5	AO10	S05	埋土2層	土師器	甕	BF	—	—	6.0	ケズリ、ナデ	ナデ	ケズリ	焼成数貫		
図21-6	AN10	S05	埋土2層	土師器	甕	BF	—	—	7.2	ケズリ	ナデ	無調整	焼成数貫	砂底	
図21-7	AO10	S05	埋土2層	実直器	長頸甕	NSBF	—	—	8.2	ロクロ、ケズリ	ロクロ	無調整	還元焼貫	輪軸付	
図21-8	AO10	S05	埋土2層	実直器	甕	BF	—	—	10.3	ケズリ	ロクロ	無調整	還元焼貫	砂底	
図25-1	—	S06	埋土3層	土師器	杯	BF	—	—	5.1	ケズリ	ミガキ	ナデ	焼成数貫	内面黒色処理	
図25-2	—	S06	1床面	土師器	杯	BF	—	—	5.4	ケズリ	ナデ	両面黒	焼成数貫		
図25-3	AK10	S06	埋土11層	土師器	小型甕	RNSB	10.1	—	—	ナデ	ナデ	—	焼成数貫	輪軸付	
図25-4	AK09	S06	住1床面	土師器	甕	RNS	—	—	—	ナデ	ナデ	—	焼成数貫	輪軸付	
図25-5	—	S06	模瓦	実直器	長頸甕	RN	9.6	—	—	ロクロ	ロクロ	—	還元焼貫		
図25-6	AJ08	S06	住1床面	実直器	山口土	RNS	16.1	—	—	ロクロ	ナデ	—	還元焼貫	地質により表面硝子	
図25-7	AK10	S06	埋土9層	土師器	長頸甕	RNSB	19.2	—	—	9.6	ナデ	ナデ	無調整	焼成数貫	外面粘土層付、輪軸付
図25-8	AJ08	S06	埋土9層	実直器	長頸甕	RNSB	9.9	—	—	12.3	ロクロ、ケズリ	ロクロ	ナデ	還元焼貫	輪軸付、非五所川原産
図29-1	AQ04	S07	1床面	土師器	杯	RB	12.8	—	—	ケズリ	ロクロ、ナデ	—	焼成数貫	輪軸付	
図29-2	AN03	S07	1床面	土師器	杯	RF	12.0	7.1	6.9	ナデ	ナデ	ナデ	焼成数貫	内面硝子保層付着	
図29-3	AN04	S07	埋土3層	土師器	甕	BF	—	—	7.0	ケズリ	ナデ	ケズリ	焼成数貫		
図29-4	AQ04	S07	埋土1層	実直器	甕	B	—	—	—	平行タタキ	円錐状写留	—	還元焼貫		
図29-5	AQ04	S07	埋土1層	実直器	甕	SB	—	—	—	平行タタキ、壺子タタキ	円錐状写留	—	還元焼貫		
図30-1	AJ11	遺構外	II層	欄文	付付録	付録	—	—	—	—	—	—	焼成数貫		
図30-2	AO09	遺構外	II層	土師器	杯	RB	—	—	—	ロクロ	ロクロ	—	焼成数貫		

表 7-2 出土遺物観察表 (2)

図版 No.	グリッド	遺構名	層位	種別	石材	法量				備考
						長さ	幅	厚さ	重量	
図 11-6	AK11	SI02	埋土 2 層	石礎	珪質頁岩	3.1	1.6	0.5	2.0	
図 17-4	AM07	SI03	床面	砥石	安山岩	62.2	24.5	195.4	2365	鉄器による線状痕あり
図 17-5	AM07	SI03	床面	砥石		14.4	7.1	6.2	820	鉄器による線状痕あり

表 7-3 出土遺物観察表 (3)

図版 No.	グリッド	遺構名	層位	種別	形態	残存度	法量				調整	備考
							長さ	幅	孔径	重量		
図 17-2	AL04	SI03	床面	土鉢	紡錘形	完形	6.0	1.9	0.7	17.5	ナデ	
図 17-3	—	SI03	埋土 4 層	土鉢	長円形	端部欠損	(3.9)	1.6	0.6	9.3	ナデ	
図 21-9	AN10	SI05	埋土 2 層	土鉢	長円形	完形	6.3	1.6	0.6	14.0	ナデ	
図 21-10	—	SI05	礎丸	土鉢	紡錘形	端部欠損	(5.0)	1.7	0.6	13.6	ナデ	
図 30-3	—	遺構外	II 層	土鉢	紡錘形	完形	6.2	1.9	0.6	19.2	ナデ	
図 30-4	—	遺構外	礎丸	土鉢	長方形	完形	6.6	1.6	0.5	15.4	ナデ	
図 30-5	—	遺構外	礎丸	土鉢	紡錘形	端部欠損	(7.4)	1.9	0.6	18.7	ナデ	
図 30-6	—	遺構外	礎丸	土鉢	長円形	完形	5.4	1.7	0.6	15.8	ナデ	
図 30-7	—	遺構外	礎丸	土鉢	長円形	端部欠損	(6.1)	1.9	0.6	16.8	ナデ	
図 30-8	—	遺構外	礎丸	土鉢	長円形	端部欠損	(3.9)	2.2	0.6	13.3	ナデ	
図 30-9	AN10	遺構外	礎丸	土鉢	長円形	端部欠損	(4.9)	1.5	0.6	8.0	ナデ	
図 30-10	AN10	遺構外	礎丸	土鉢	長円形	端部欠損	(4.2)	1.9	0.6	12.4	ナデ	
図 30-11	AE03	遺構外	II 層	土鉢	長円形	端部欠損	(5.0)	1.9	0.6	11.6	ナデ	外面被熱

\* 1. 表中の「残存部位」の略記号は以下の通りである。

R: 口縁部、N: 頸部、S: 体部上半、B: 体部下半 例 RNS: 口縁部～体部上半

2. 「法量」の単位は、長さを測るものは cm、重量は g である。
3. 「底部調整」の略字 (回糸 R) は右回転糸切離し無調整のことである。
4. 表中の (—) は欠損しているため不明であるという意味である。

## 第4章 川倉小学校遺跡の自然科学分析

パリオ・サーヴェイ株式会社

### はじめに

五所川原市川倉小学校遺跡は、岩木川の支流である新川左岸台地上に位置する。この台地は、吾妻(1995)でⅢ m面に分類された海成段丘であり、最終間氷期最盛期(酸素同位体ステージ5e)の海進によって形成されたと考えられている。今回の発掘調査により、古代の堅穴住居跡等が検出されている。このうち、SI-06は焼失家屋であり、住居構築材と考えられる炭化材が出土している。また、SI-02では住居の覆土内にテフラと考えられる堆積物が認められた。

今回の分析調査では、住居の埋没年代に関する資料を得るため、SI-02のテフラと考えられる堆積物についてテフラ分析を実施する。また、住居構築材の樹種選択に関する資料を得るため、SI-06から出土した炭化材の樹種同定を実施する。

### 1. テフラ分析

#### (1) 試料

試料は、古代とされた住居跡SI-02およびSI-06の覆土よりそれぞれ採取された堆積物2点である。試料名は、SI-02埋土2層、SI-06埋土5層である。試料の外観はにぶい黄褐色を呈する砂質シルトであり、発掘調査所見では、いずれも火山灰(テフラ)であると考えられている。

#### (2) 分析方法

試料約20gを蒸発皿に取り、水を加え泥水にした状態で超音波洗浄装置により粒子を分散し、上澄みを流し去る。この操作を繰り返すことにより得られた砂分を乾燥させた後、実体顕微鏡下にて観察する。観察は、テフラの本質物質であるスコリア・火山ガラス・軽石を対象とし、その特徴や含有量の多少を定性的に調べる。

火山ガラスは、その形態によりバブル型・中間型・軽石型の3タイプに分類した。各型の形態は、バブル型は薄手平板状、中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは破砕片状などの塊状ガラスであり、軽石型は小気泡を非常に多く持った塊状および気泡の長く伸びた繊維束状のものとする。

さらに火山ガラスについては、その屈折率を測定することにより、テフラを特定するための指標とする。屈折率の測定は、古澤(1995)のMAIOTを使用した温度変化法を用いた。本分析では、後述するように2点ともに同一テフラであると考えられることから、SI02埋土2層の1点について屈折率の測定を行った。

#### (3) 結果

処理後に得られた砂分は、多量の細砂～極細砂径の火山ガラスから構成される。火山ガラスは無色透明のバブル型が多く、それよりやや少ない無色透明の軽石型も混在する。軽石型には塊状および繊維束状のものが認められる。

火山ガラスの屈折率測定結果を図31に示す。n1.515～1.523のレンジに入り、n1.520付近にモードがある。

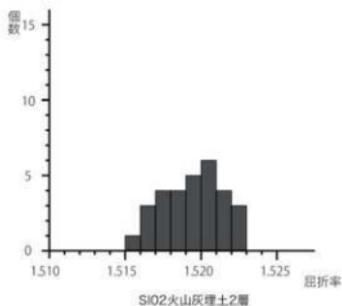


図31 火山ガラスの屈折率測定結果

## (4) 考察

試料は、細粒の火山ガラスを主体とするテフラである。上述した碎屑物の特徴および川倉小学校遺跡の地理的位置と、これまでに研究された東北地方におけるテフラの産状(町田ほか(1981;1984), Arai et al.(1986), 町田・新井(2003)など)との比較から、そのテフラは、白頭山苦小牧テフラ(B-Tm)に同定される。B-Tmは、10世紀に中国と北朝鮮の国境に位置する白頭山から噴出したテフラであり、岩手・秋田県北部以北と北海道のほぼ全域で確認されている(町田ほか,1981;町田・新井,2003)。なお、その詳細な噴出年代については、早川・小山



図 32 B-Tmの火山ガラス (SiO<sub>2</sub> 埋土2層)

(1998)が歴史記録の解釈から、西暦946年としている。ただし、14C年代や年輪年代および湖成層の年輪などの研究成果とは必ずしも一致しておらず、町田・新井(2003)は未解決であるとしている。

今回の試料がほぼ火山ガラスのみから構成されることから、試料が採取された住居跡土層は、B-Tmの降灰層に相当する可能性が高い(図32)。その場合、それらの住居跡は、B-Tmの降下堆積した10世紀には、すでに廃絶されていたとすることができる。

## 2. 炭化材の樹種同定

## (1) 試料

試料は、SI06から出土した炭化材10点(C-1～10)である。

## (2) 分析方法

木口(横断面)・柀目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の剖断面を製作し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織を観察し、その特徴から種類を同定する。なお、同定の根拠となる顕微鏡下での木材組織の特徴等については、島地・伊東(1982)およびWheeler他(1998)を参考にする。また、各樹種の木材組織の配列の特徴については、林(1990)、伊東(1995,1996,1997,1998,1999)や独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースを参考にする。

## (3) 結果

樹種同定結果を表8に示す。各種類の解剖学的特徴等を記す。

## ・ヒノキ科(Cupressaceae)

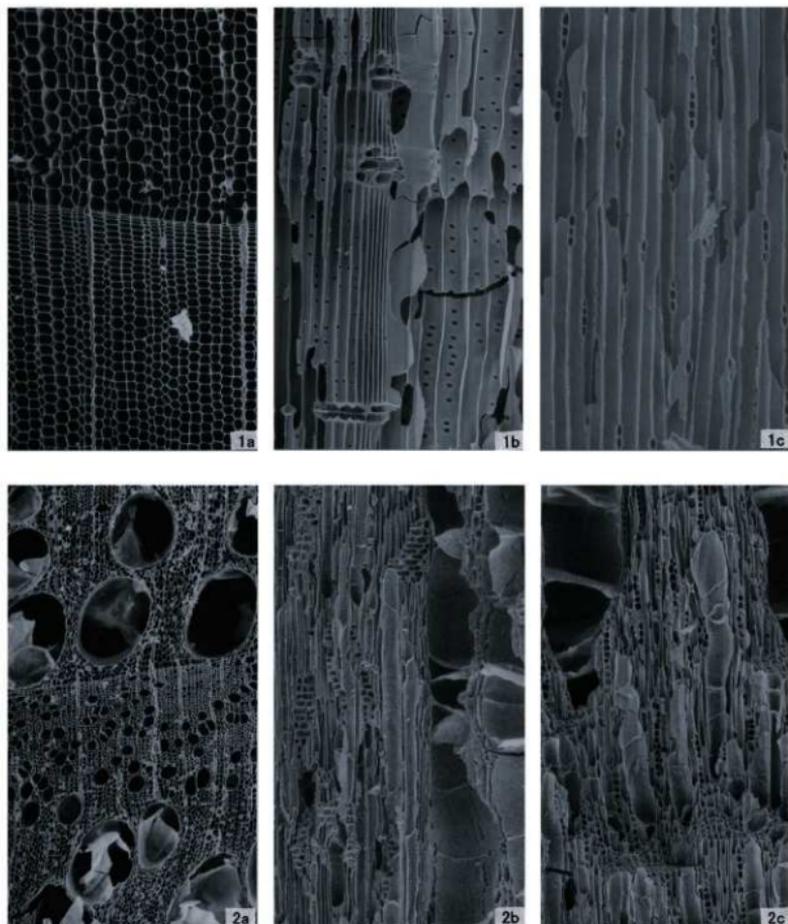
軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔は保存が悪く観察できない。放射組織は単列、1-10細胞高。

資料No.	遺構名	グリッド	出土位置	樹種
C-1	SI06	AK09	壁溝	ヒノキ科
C-2		AK09	壁溝	ヒノキ科
C-3		AK09	壁溝	ヒノキ科
C-4		AK09.10	壁溝	クリ
C-5		AJ10	壁溝	ヒノキ科
C-6		AJ10	壁溝	ヒノキ科
C-7		AI09	壁溝	ヒノキ科
C-8		AI09	壁溝	ヒノキ科
C-9		AI09	壁溝	ヒノキ科
C-10		AI08	壁溝	ヒノキ科

表 8 樹種同定結果

・クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ属

環孔材で、孔部は3-4列、孔圏外で急激～やや緩やかに管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-15細胞高。



1. ヒノキ科 (SI06 : C-1)

2. クリ (SI06 : C-4)

a: 木口, b: 椋目, c: 板目

200 $\mu$ m : 2a

200 $\mu$ m : 1a・2b,c

200 $\mu$ m : 1b,c

図33 炭化材

## (4) 考察

SI06 から出土した炭化材は、住居の構築部材と考えられるが、出土状況等の詳細は不明である。炭化材は、C-4 に落葉広葉樹のクリが認められた他は全て針葉樹のヒノキ科であり、針葉樹の利用が多い。ヒノキ科の木材は、一般的に木理が通直で割裂性が高く、加工が容易で耐水性が高い。なお、ヒノキ科には、ヒノキ、サワラ、アスナロ、クロベ等の有用材が含まれるが、本地域ではアスナロの変種であるヒノキアスナロ（ヒバ）が一般的であることから、今回の炭化材もヒノキアスナロの可能性がある。一方、クリは、重硬で強度および耐朽性が高いが、加工はやや困難である。

本地域では、源常平遺跡、山本遺跡、野尻(1)遺跡等で古代の住居跡から出土した木材の樹種同定が実施されている（嶋倉,1978,19887;高橋,2003）。その結果をみると、クリとヒノキ科（アスナロ）は共に利用されており、全体的にクリが多い傾向がある。今回の結果では、アスナロが多い点でやや異なるが、いずれもこれまでの調査で確認例のある樹種である点はこれまでの結果と調和的である。利用樹種の比率は、遺存している部位の構成などによっても異なる可能性があり、今後部位を明らかにした上で検討する必要がある。

## 引用文献

- 吾妻 崇 (1995) 「変動地形からみた津軽半島の地形発達史」『第四紀研究』34号 pp.75-89.
- Arai,F.・Machida,H.・Okumura,K.・Miyachi,T.・Soda,T.・Yamagata,K,1986,Catalog for late quaternary marker-tephras in Japan II - Tephras occurring in Northeast Honshu and Hokkaido -.Geographical reports of Tokyo Metropolitan University No.21,223-250.
- 古澤 明 (1906) 「火山ガラスの屈折率測定および形態分類とその統計的な解析に基づくテフラの識別」『地質学雑誌』101号 pp.123-133
- 早川由紀夫・小山真人 (1998) 「日本海をはさんで10世紀に相次いで起こった二つの大噴火の年月日-十和田湖と白頭山-」『火山』43号 pp.403-407
- 林 昭三 (1991) 「日本産木材 顕微鏡写真集」京都大学木質科学研究所。
- 伊東 隆夫 (1995) 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ」『木材研究・資料』31, 京都大学木質科学研究所 pp.81-181
- 伊東 隆夫 (1996) 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ」『木材研究・資料』32, 京都大学木質科学研究所 pp.66-176.
- 伊東 隆夫 (1997) 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ」『木材研究・資料』33, 京都大学木質科学研究所 pp.83-201
- 伊東 隆夫 (1998) 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ」『木材研究・資料』34, 京都大学木質科学研究所 pp.30-166
- 伊東 隆夫 (1999) 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ」『木材研究・資料』35, 京都大学木質科学研究所 pp.47-216
- 町田 洋・新井房夫 (2003) 『新編 火山灰アトラス』東京大学出版会 p.336
- 町田 洋・新井房夫・森脇 広 (1981) 「日本海を渡ってきたテフラ」『科学』51号 pp.562-569
- 町田 洋・新井房夫・杉原重夫・小田静夫・遠藤邦彦 (1984) 「テフラと日本考古学-考古学研究と関連するテフラのカatalog-」『古文化財に関する保存科学と人文・自然科学』同朋舎 pp.865-928
- 島地 謙・伊東 隆夫 (1982) 『図説木材組織』地球社 p.176
- 嶋倉 巳三郎 (1987) 「山本遺跡出土の炭化木」『山本遺跡』(青森県埋蔵文化財調査報告書第105集) pp.203-204.
- 嶋倉 巳三郎 (1978) 「昭和51年度青森県内の遺跡から出土した炭化材の樹種について」『源常平遺跡発掘調査報告書』(青森県埋蔵文化財調査報告書第39集) pp.388-389.
- 高橋 利彦 (2003) 「野尻(1)遺跡出土材。炭化材の樹種」『野尻(1)遺跡 V』(青森県埋蔵文化財調査報告書第351集) pp.180-184.
- Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E. (編) (1998) 『広葉樹材の識別 [AWAによる光学顕微鏡的特徴リスト]』
- 伊東 隆夫・藤井 智之・佐伯 浩 (日本語版監修) 海青社 p.122 [Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.(1989)IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].

## 第5章 小論

### 第1節 川倉小学校遺跡の竪穴住居跡について

第3章で前述したように川倉小学校では7棟の住居跡が検出された。この内時期が確定できたものが5棟あり、SI02・05・06・07が白頭山火山灰が堆積土中に確認されたことから、10世紀第1～2四半期にかけて形成されたものと考えられる。そこで、火山灰層の堆積状況からある程度の時期差が確認され、古い順にSI02→SI06→SI05・SI07と変遷していったことが判明した。但しこの変遷もカマドの使用期間が短い（あまり被熱を受けていないことから）短期間の内に行われたものと考えられる。

SI03は遺構確認面より白頭山火山灰降下後に作られており、当遺跡で確認された住居跡としては最も新しいものであり、10世紀第3四半期に位置づけられる。規模が1辺10mを超える巨大な住居跡であること、床面に主柱穴を有すること、カマドの構造が半地下式であることが他の住居跡と異なる点である。床面の硬化度は低く、カマドの規模も他の住居跡と変化無く小規模なものであり、その使用頻度も低いため、日常的に使用されていた一般の住居跡と異なり、集会場的使用等が考えられる。

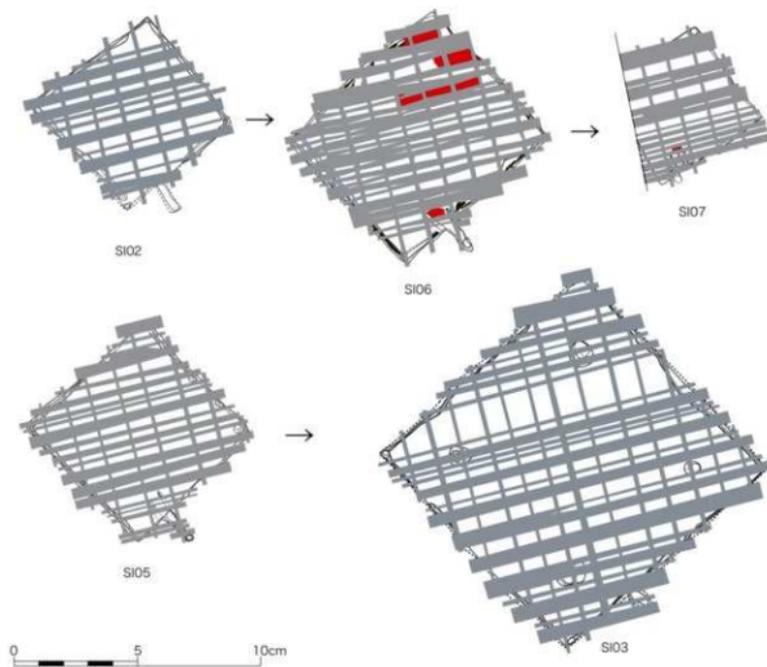


図34 竪穴住居跡の変遷図

こうした2時期の異なる住居跡が建てられているものの、カマドの軸方位には、殆ど変化が認められず、これら住居跡には時期差はあるものの、あまり隔絶したものではないことが窺える。

## 第2節 出土管状土錘について

本遺跡からは13点の土錘が出土している。この平安時代の土錘については、横井（2005）、斎藤（2005）に詳細が述べられており、それを参考にして当遺跡の土錘の概略を述べたいと思う。まず、青森県内における平安時代の土錘の出土した遺跡は、図35によると全部で50箇所以上を数えることができる。分布の中心は岩木川流域に集中しており、1遺跡で土錘が200点以上出土している遺跡もこの地域のみであり、つがる市久米川遺跡、同市石上神社遺跡である。また100点以上出土している遺跡として中里城跡が挙げられる。

平安時代の土錘には、野尻（4）遺跡SI113覆土中で出土した有溝土錘や発茶沢遺跡で出土した球形状の一部を指によりつまみ出しそこに穿孔した釣用の錘と考えられているものを除けば、管状土錘が主体である。管状土錘にはその長軸断面形態が円形、長方形、長円形、紡錘形を呈するものが見られ、本遺跡に認められるものはその内の方形と紡錘形のものである。法量は工藤、斎藤によれば、長さ50mm～55cm、幅15mm～20mm、孔径5～6mm、重量10～20gの個体が突出しているという（工藤 1994、斎藤 前掲）。本遺跡出土土錘は破損品が多く、完形品は5点であるが、長さ54～66mm、平均61.0mm、幅15～19mm、平均17.9mm、孔径は5～7mm、平均6mm、重量は14.0～19.2g、平均16.4gを測り、長さでは若干長いものの、幅、孔径、重量では上述の範囲内に収束する。これは斎藤の述べている岩木川下流域部での土錘の特徴と一致している（斎藤 前掲書の図5）。

製作手順は、断面円形の棒状のものに粘土を巻き付け、指ナデにより整形した後、乾燥前に中の芯材を引き抜き焼成していると考えられる（芯材を引き抜いた時に動いた粘土痕が先端部で確認され



図35 青森県内における古代の土錘出土遺跡位置図（横井 2005、斎藤 2005より抜粋）

た)。焼成状況はいずれも良好である。

遺物の破損状況を見ると端部が切れ込み状に破損しているものや中心部が横断面に沿って破損している例が多く、端部が破損しているものは、孔に網を通して使用した際に意図的に破損したか、あるいは使用中に破損したものと考えられ、後者においては、斎藤の述べているように、網との結節部分に力加わることによって破損したものと考えられる（斎藤 前掲）。

SI03 から出土した土鍾にはつがる市石上神社遺跡、同市江野島遺跡、中泊町唐崎遺跡で見られるようにヘラ描記号「×」が見られる。これは五所川原産須恵器にも同様のヘラ記号が描かれているが、所有者あるいは制作者のサインである可能性が高い。

本遺跡で出土した土鍾は、4点を除いていずれも遺構外からの出土であるが、出土点数が少ないことから、隣接する河川での小規模な刺網漁が行われていたと考えられる（斎藤 前掲）。

### 第3節 出土土器について

土師器のミニチュアがSI02で2点出土している。いずれも作りは粗雑で焼成状況も不良であるため実用品の可能性は低いと考えられる。

坏では全体（18点）の50%が非ロクロの内黒土師器であり、ロクロ土師器は33.3%であり、残りの16.7%が非ロクロ無処理の坏である。口径11.6～13.4cm、平均12.43cm、器高5.9～7.1cm、平均5.86cm、底径5.0～7.0cm、平均5.86cmを測る。整形技法は、非ロクロのものが、外面にケズリやナデ調整、内面にはナデやミガキ調整が施されている。ロクロ土師器の中に粘土紐による輪積痕が見られる個体があり、水引き技法ではなく、整形段階でロクロを使用していた個体も確認された。

土師器の小型甕は全体を復元できた個体が少ないが、全体（11点）の27.3%がロクロ使用の個体であり、残りの72.7%は非ロクロの個体である。口径10.1～15.6cm、平均12.98cmを測る。整形技法は、非ロクロ、ロクロ両方ともに外面にケズリやナデ調整、内面にはナデ調整が施されている。底面は無調整とケズリ調整のものが確認された。

土師器の長胴甕は全体が復元できた個体はなく口縁部及び底部破片であるが、全体（18点）の22.2%がロクロ使用で、残りの77.8%が非ロクロであり、非ロクロの比率が非常に高い。口径18.4～22.2cm、平均20.78cm、底径5.1～10.2cm、平均8.06cmを測る。非ロクロ、ロクロ両方ともに外面にケズリやナデ調整、内面にはナデ調整が施されている。底面は無調整（40%）とケズリ調整（60%）のものが確認され、無調整のものの内砂底のものが半数確認された。

以上のように当遺跡出土の土師器はロクロの使用が認められるものの、その比率は坏（33.3%）、小型甕（27.3%）、長胴甕（22.2%）であり、量法が大きくなるにつれてその使用率が減少する傾向が窺える。また、整形技法においては各器種において差異が認められず、同様の製作技法を使用していたと考えられる。

須恵器では長頸壺、広口壺、甕が確認された。その多くが五所川原産須恵器であると考えられるが、SI06から出土した長頸壺は、胎土、焼成状況、リング状凸帯が無いこと、高台の底面が菊花状になっていない点等から考えて、非五所川原産であると考えられる。また坏の出土が見られないことから、住居跡の主体を占める10世紀第2四半期には既に坏の供給が少なくなっていた可能性が考えられる。

その他にSI07から羽目と鉄滓が出土している。今回の調査では製鉄に関連する遺構は確認できなかったが、周辺には製鉄遺構が存在する可能性が高いと考えられる。

## 第6章 まとめ

川倉小学校遺跡は、旧金木町教育委員会による試掘調査と五所川原市教育委員会による発掘調査の結果、平安時代の竪穴住居跡が7棟検出され、古代の集落跡であることが判明した。

検出された7棟の竪穴住居跡は、規模は長軸で351cm～1108cmとばらつきがあるが、一般的な住居跡は600cm前後に収束する。カマドの主軸方位はN-136°～146.5°-Eであり、すべて南東方向を向いている。また住居内に白頭山火山灰が堆積していたことより、その堆積状況によって古い順にSIO2→SIO6→SIO5・SIO7と変遷していったことが判明した。カマドは各住居とも廃絶時に破壊されており、正確なことは不明であるが、残存している煙道部の状況から白頭山火山灰降下前後で地下式から半地下式へと変化することが判明した。

建物の構造では、いずれも形状は方形を呈し、周囲に壁溝を持ち、各コーナに柱穴を持つタイプであった。但し、一辺10mを超えるSIO3は、その構造上から、住居床面の4隅部分に直径30cm前後、深さ30cm前後の支柱穴を持つタイプである。

SIO6は焼失家屋であり、その壁溝中から炭化材が多数検出され、使用している部材の樹種同定を行ったところ、炭化材10点の内9点はヒノキ材であり、1点はクリ材であることが判明した。これは古代の住居跡で一般的に使用されている木材と一致する。また一旦焼失後に建て替えた後再び焼失していることが判明し、最後の火元が床面がスロープ状に高くなっている入り口付近と考えられることから、故意に出火しているものと考えられる。

各住居跡から出土した遺物については、土師器に関しては非ロクロの土器が主体を占め、ロクロ土師器は僅かである。坏に関してはロクロ土師器も多く認められるが、その半数が圧倒的に内面黒色処理が施された非ロクロの内黒土師器が主体を占める。

須恵器の出土量は少なく、坏の出土は見られなかった。殆どの個体が五所川原産須恵器であると考えられるが、SIO6で出土した長頸壺のように非五所川原産須恵器も出土していることから、当遺跡の流通を考えるうえで注意しなければならない点であると考えられる。

管状土錘が遺構内外から13点出土している。形状は近隣の遺跡から出土している個体と差異はなく、その縦断面形は長方形あるいは紡錘形であった。出土点数や錘が小型である点から周辺の河川におけるフナやウグイ等の川魚を主体とした小規模な刺網漁が行われた可能性が高い。

今後の課題としては、鉄滓や羽口がSIO6より出土していることから、製鉄遺構が周辺に存在する可能性が高いことより、今後周辺の調査が実施されることになれば、その点を考慮しながら調査していかなければならない。

### 引用・参考文献

- 青森県教育委員会（1977）『石上神社遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第35集
- 青森県教育委員会（1982）『発見沢遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第67集
- 青森県教育委員会（1988）『生沢遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第130集
- 青森県教育委員会（1994）『稲垣村久米川遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第163集
- 青森県教育委員会（1994）『山元(2)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第171集
- 青森県教育委員会（1995）『高野川(3)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第179集
- 青森県教育委員会（1995）『高屋敷館遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第243集
- 青森県教育委員会（1998）『青森県遺跡地図』

- 赤平 智尚 (1995) 「第Ⅲ章第2節 歴史的環境」『千刈(1)遺跡』(青森県埋蔵文化財調査報告書第174集)
- 青森県教育委員会 (2005) 『倉越(2)遺跡・大越前遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第389集
- 大橋 和夫 (1976) 『金木地方の歴史 I 先史時代(2) 金木の縄文遺跡と遺物』『金木郷土史』金木町
- 工藤 大 (1994) 「第7章 分析と考察 第2節 遺物 土鍾」『稲垣村久米川遺跡』  
(青森県埋蔵文化財調査報告書第163集) pp.257-259
- 斎藤 淳 (2005) 「岩木川流域における古代の漁撈について」『葛西先生還暦記念論文集 北奥の考古学』pp.503-518
- 竹内 正光 (1977) 「金木町千刈遺跡出土の銅鏝について」『考古風土記』第2号
- 藤井 敬三 (1966) 『5万分の1地質図幅説明書 金木(青森一第14号) 地質調査研究所』
- 三浦 圭介 (1995) 「資料編1 考古編 第3章 古代」『新編 弘前市史』
- 村越 潔 (1976) 『金木地方の歴史 I 先史時代(1) 先史・原始時代』『金木郷土史』金木町
- 横井 猛志 (2005) 「第5編 まとめ 第3章 倉越(2)遺跡出土の管状土鍾について」  
『倉越(2)遺跡・大池館遺跡』(青森県埋蔵文化財調査報告書第389集) 青森県教育委員会 pp.164-167
- 山口 義伸 (1995) 「第Ⅲ章第1節 遺跡周辺の地形と地質」『千刈(1)遺跡』  
(青森県埋蔵文化財調査報告書第174集) pp.5-14



写 真 图 版





1. SI01・04 完掘状況



2. SI01 カマダセクション



3. SI02 遺物出土状況



4. SI02 炭化材出土状況



5. SI02 南北セクション



6. SI02 完掘状況



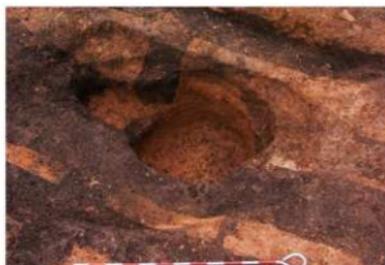
7. SI03SP01 完掘状況



8. SI03SP02 完掘状況



1. SI03SP03 完掘状況



2. SI03SP04 完掘状況



3. SI03 カマド完掘状況



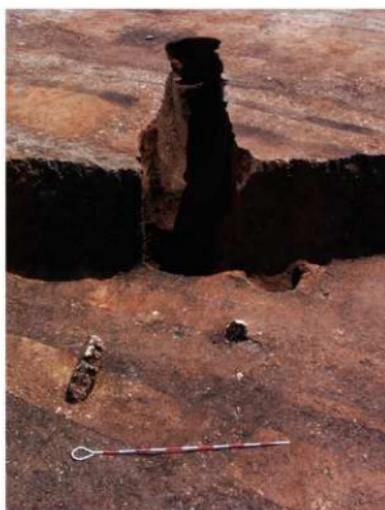
4. SI03 出土碓石



5. SI03 完掘状況



6. SI05 東西セクション



7. SI05 カマド完掘状況



1. S105 完掘状況



2. S106 床面被熱状況



3. S106 床面堆積状況



4. S106 出土炭化材



5. S106 完掘状況



6. S107 カマド完掘状況



7. S107 完掘状況



8. 調査作業員



写真図版4 (SI01・02 出土遺物)

SI03



16-1



16-2



16-3



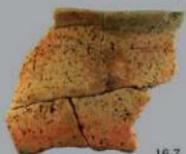
16-5



16-6



16-4



16-7



16-8



16-9



16-10



16-12



16-13



16-11



16-14



17-1



17-2

17-3



17-5a



17-5b



17-5c



17-5d

写真図版 5 (SI03 出土遺物)

SI03



17-4a



17-4b



17-4c



17-4d

SI05



21-1



21-2



21-3



21-4



21-7



21-5



21-6



21-8



21-9



21-10

SI06



25-1



25-3



25-4



25-5



25-2



25-6

写真図版 6 (SI03・05・06 出土遺物)



写真図版7 (SI06・07・遺構外出土遺物)

## 遺 跡 抄 録

ふりがな	かわくらしょうがっこういせきはっくつちょうさほうこくしよ							
書名	川倉小学校遺跡発掘調査報告書							
副書名								
シリーズ名	五所川原市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第 28 集							
編集者名	藤原 弘明							
編集機関	五所川原市教育委員会							
所在地	青森県五所川原市金木町朝日山 319-1							
発行年月日	平成 18 年 3 月 25 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査 面積	調査期間	調査原因
		市町村	遺跡番号					
川倉小学校遺跡	五所川原市 金木町七夕野 84-444,445	022-35	016	40° 55′ 20″	140° 27′ 20″	3000 m <sup>2</sup>	20050704 ～ 20050812	開発行為 に伴う発 掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
川倉小学校遺跡	集落跡	縄文時代 平安時代	竪穴住居跡 7 棟	縄文土器 石鏃 土師器 須恵器 土鍾 砥石 羽口 鉄滓	<ul style="list-style-type: none"> <li>・住居跡の所属年代は 5 棟が白頭山火山灰の堆積状況から 10 世紀の第 2 四半期であり、1 棟が 10 世紀の第 3 四半期である。</li> <li>・一辺 10m を超える巨大な住居跡が検出された (SI03)。</li> <li>・SI06 で検出された建築部材にはブナ材とクリ材が使用されていた。</li> <li>・遺構内外より 13 点の土鍾が出土しており、周辺の河川での網漁が行われていたと考えられる。</li> </ul>			

五所川原市埋蔵文化財調査報告書第 28 集

川 倉 小 学 校 遺 跡

---

---

発行日 平成 18 年 3 月 23 日

発 行 五所川原市教育委員会

〒 037-0202 青森県五所川原市金木町朝日山 319-1

TEL 0173-53-2111

印刷 有限会社 西北印刷

〒 037-0014 青森県五所川原市大字稲矢字米崎 49-3

TEL 0173-35-1303